

自主的主体的な学習活動を支えるものと 今後の学校教育・異文化理解の指導のあり方

—米国ノースカロライナ州スモーキー・マウンテン・ハイスクールの教育視察を通して—

徳島県立鳴門第一高等学校 教諭 稲井 一 雄

I はじめに

アメリカの学校教育は、日本とは全く異質であると言われる。国内外の多様な異文化を抱え、アメリカ社会が開拓者時代から培ってきた民主主義的・愛国的な精神に加え、州毎に異なった建国の過程や価値観を持っているためであろうと思われる。

一方、日本の教育は、開国以来、国民全体の教育水準の上昇を目指してきて、今も効率を求めた画一的・一斉的な色彩が根強く残っている。

戦後、アメリカ教育使節団の基本方針に沿って六三三制の教育制度がスタートし、教育関係法規が整い、新制学校が次々に発足した。文部省を初め、中央政府主体の教育改革が幾たびか進められてはきたが、教育行政は縦割りで、現在も40人学級であるということもあって、抜本的改革は進まず、画一的・一斉的風潮は当分終止することがないであろうと思われる。高等学校でも近々導入されることになっている「総合的な学習の時間」は、そうした風潮に対する緊急療法的措置であると見られている。

これまでの日本の効率的教育を評価しながらも、生徒の意思と個性を尊重し、自主的主体的に学習に取り組めるよう、そのモデルをアメリカの教育制度や高等学校の教育活動に求め、生徒が自主的主体的な学習に取り組む、学力の定着をはかるための要件を考察する。また、さしあたっての教育改革案や、異文化理解のための指導命題なども考えてみたい。

II 研究の概要

1 研究目的

ノースカロライナ州スモーキー・マウンテン・ハイスクールでの学習活動の様子や体験から、その取り組みの背景にある教育制度や教育環境などを考察し分析することによって、日米間の高等学校の教育活動の相違点と共通点とから、個性的で自主的主体的な学習の根源を探り、異文化理解の指導上の命題や具体的な教育改革案を提示するためである。

2 主な観察対象

- (1) 対象校の教育環境とその教育背景及び地域の実態
- (2) 実践的立場から見た対象校の生徒の能力や取り組みの様子
- (3) 学校図書館の役割やその他のメディアと学校教育活動との関わり

3 研究方法

現地での学習活動状況の観察記録や実践内容を文章データ化しておき、その後の教育資料の内容やコンタクトパースンとの交信による情報拡張・情報修正によって、アメリカにおける教育の特質を理解し、日本における教育の状況と比較検討しながら、異文化理解の際の指導命題や教育改革に向けての具体策を考察する。

4 教育視察・調査日程

スモーキー・マウンテン・ハイスクール訪問

所在地 米国ノースカロライナ州ジャクソン郡シルバ

期 間 3月28日から3月31日まで

3月28日(火)

時限(90分)、教科(教師名)、対象学年

1時限 英語(Salzano先生)11学年

フランス語(Henderson先生)全学年

スペイン語(Lewis先生)全学年

2時限 High School US (Barker先生)

10, 11, 12学年

College Level US II history

(Pendergast先生)11, 12学年

3時限 昼食

Henke校長先生との懇談

4時限 産業テクノロジー(Taylor先生)

10, 11学年

3月29日(水)

1時限 朝食

2時限 応用英語(Bell先生)12学年

Drafting Class (Stewart先生)

- 10, 11, 12学年
- 3 時限 上級英語 (Preston先生) 12学年
 コンピュータ・サイエンス (Programming) (Carnes 先生) 10, 11, 12学年
 バンド音楽 (Franklin先生) 全学年
- 4 時限 健康職業教育 (Health Occupation) (Hess先生・Fisher先生) 全学年
- 2 クラス合同
- 放課後、WCUの校内にあるContinuing education and Summer Schoolの見学

3月30日 (木)

- 1 時限 英語 (A. Pendergast先生) 9 学年
 英語 (Sample先生) 12学年
- 2 時限 Chorus Media 全学年
 学校図書館 (David Proffiff
 メディアスペシャリスト)
- 3 時限 世界史 (M. Pendergast 先生) 10学年
 学校新聞 (Rice先生) 10, 11, 12学年
- 4 時限 英語 (A. Pendergast 先生) 9 学年

3月31日 (金)

- 1 時限 学校管理 (Fernandez副校長先生)
- 2 時限 建築 (Greer先生・Middleton先生)
 10, 11, 12学年
- 3 時限 Senior Project (Pam先生) 12学年

4月1日 (土)

ホームステイ

4月2日 (日)

ビルトモア・ハウス見学。州都ローリーへ移動。

4月3日 (月)

Exploris Middle School (チャータースクール) 訪問
 North Carolina Department of Public Instruction訪問

III 研究の結果と考察

1 地域の特殊性と学校

1989年、従来のハイスクールを統合し、新しく創立された州立のスモーキー・マウンテン・ハイスクールは、ジャクソン郡の各地から年間950人以上の生徒を受け入れ、多様な学科・科目を提供している。

その名の通り、スモーキー・マウンテン・ハイスクールは、アメリカ南東部ノースカロライナ州の西部地区、

グレート・スモーキー山地を仰ぎ見るアパラチア高地のジャクソン郡シルバという町にある。

私たち現場教師、西地区学校訪問団7名が、アシュビルから大学のバンに乗せられ、ウェスタン・カロライナ大学(WCU)のあるカロウイーという大学町にいく途中、うねうねとした山あいの傾斜路を上っていったが、グレート・スモーキー山地に平行して走っているブルーリッジ山脈があるあたりであろう。

ピーモント高原に位置するシャーロットの国際空港から飛行機でさらに西方のアシュビルの空港に飛んで降り立ち、そこからさらに西の山地へと大学のバンで行った。日本にもよく似た地形があって、川筋伝いに山間を縫っていくような所である。

ジャクソン郡が海拔差を感じさせないのは、そのあたりの山々やアパラチア山地の造成年代が古く、一帯がなだらかな丘陵地帯となっているためであろう。

文化の伝播状況のよくない、いわば陸の孤島であるため、めばしい産業がなく、時流に遅れまいとする人々の国際的な関心の高さや高等教育志向が伺える。

ジャクソン郡には、一昨年、州立大学となったウェスタン・カロライナ大学(4年制)やカロライナ・コミュニティ・カレッジ(2年制)といった高等教育機関がある。ウェスタン・カロライナ大学やカロライナ・コミュニティ・カレッジと高等学校とは密接な交流システムがある。

したがって、スモーキー・マウンテン・ハイスクールは、高等教育への橋渡しを担い、地域の産業を支える学校として、ジャクソン郡の人々の期待を一心に集めている公立学校であると言える。

2 スモーキー・マウンテン・ハイスクールの教育環境

州の教育方針に、昨年からコンピュータ・スキル・テストに合格しなければ、高等学校が卒業できないとあるが、コンピュータは、高等教育を受けるためにも、また、仕事を持つ上においても、また、地域性を克服する上においても必須である。スモーキー・マウンテン・ハイスクールの校内にランが走り、生徒がインターネットの使用ができる各教室や図書館や遠隔教育が受けられる電子テレビ会議システムのラボがある。

各教室には、担当教師の教育実践の積み重ねとしての掲示物が貼られ、指導の必要性からOHP、プレゼンテーション可能なコンピュータ、タッチボード、ビデオ、窓のブラインドなど、指導方法として可能な限

りの教育機器や設備が完備している。指導の際、黒板をあまり使わないのが印象的であった。

教室は、学習指導目的と教室の環境とが一致していた。

3 生徒の学習への取り組み態度や能力

アカデミックな必須コースでも、クラス人数も多くないので、教師の管理の目も行き届きやすい。教師は、学習指導専門のプロとして授業のみに専念し、生徒も熱心に授業に取り組んでいるように見えた。

学習能力が必ずしも高い生徒ばかりではない。就職コースもあれば、大学レベルのコースもある。能力も多種多様である。それで、学校は生徒が各自プログラムできるさまざまなコースやクラスレベルのメニューを用意していた。

生徒の気質であるが、少し指導して接触してみた限り、日本の生徒とそう違わない。珍しい訪問客を親切にもてなし、礼儀をわきまえ、日本人教師が提示する学習内容も、明瞭な論理を提示する限り、ほとんど理解され納得されることを確認した。

意外だったのは、授業中寝たりする生徒はいないし、手を挙げてよく質問する。教師が話すときは静かに聞き、語学などで教師が発音すれば、生徒がすぐリピートするなど、授業を受ける際の基本的態度がよかったことである。

教科によっては宿題が毎日与えられ、それを確認して次に進むなど、学習指導が徹底し、学習内容の定着化を意図する光景も見られた。

生徒の真摯な学習への取り組みは、次のような教育制度や学校システムにも関連していると思われる。

4 教育制度や学校システム

ノースカロライナ州では、現在新ABCs政策を進めている。従来のABCs政策のAとは、Accountabilityのことで、管理職、教師、その他の教職関係者、両親、生徒が積極的に責任を負うことを政策として掲げている。Bとは、The basic subjects of reading, writing and mathematics, で、基礎的な読み、書き、計算能力である。Cとは、More local control で、より地方に権限を持たせるということである。

新ABCs政策はAccountabilityの基準が一步進んだ形で一昨年より新しく改善された。従来の高校卒業要件に加え、より基礎的な学習能力テスト(an exit exam of essential skills) やコンピュータ・スキル・

テスト(the computer skills test) が今後卒業要件として課せられることになっていて、social promotionを排除するということである。social promotionとは、お情けで進級させることである。

州の教育政策でsocial promotionを排除したのは、瞳目に値する。

スモーキー・マウンテン・ハイスクールへ入学してきた生徒は、大学進学するか、軍隊に入隊するか、就職するかを選択を主体的に迫られる。

大学進学の道は、さらに高度な職業人を養成する2年制のカレッジに進むか、4年制の大学へ進むかの選択によって、高校時代のカリキュラムが異なってくる。

生徒は、能力・適性、将来の計画に合わせて、以上の選択をしなければならない。

その上、学校では、生徒の学習意識を高め、評価をしたり、カウンセリングに使用したり、資格認定する多様な種類のテストが用意されている。

必須教科(The EOC subjects)を選択した生徒全員は、州の立案したEnd-of-Course Testを受けなければならない。この成績は正式な成績表に含まれる。就職クラスを選択した生徒には、プレ・テストや別な最終テスト(a VoCATS pre- and post-test)がある。

毎年十月第三土曜日は全国統一の予備学力評価テスト(PSAT/NMSQT)がある。これは、3年生の進学奨学金資格を兼ねている。教師の指導用ツール、生徒の能力診断として、全国レベルで能力比較が出来、クラス分けや推薦などに使用される。

ノースカロライナ州は、別名SAT州と呼ばれ、進学希望生徒は、大学資格テストであるSAT(Scholastic Assessment Test)やACT(American College Test)を受けることを勧められる。

SATはSAT IとSAT IIとがあるが、SAT Iはカレッジレベルのレディネスを評価するものであり、SAT IIはアティープメントテストで、5分野の学科の知識、スキル、応用力などを試す。地元のウェスタン・カロライナ・ユニバーシティに入るための最低得点は、950点であるが、ほとんどの生徒はそれを上回っている。

ACTは4分野の学力の発達を図るテストである。SATにしるACTにしても4年生の大学へ入学するために要求されるテストである。

CPT(Community college Placement Tests)は、Community collegeに行くためのテストで、パソコン

上で試されるテストである。

また、州が実施する8年次相当の基礎・基本の能力テスト(North Carolina Competency Test)は、合格点をクリアしないと、高校の卒業を許されない。social promotionを排除するための州のテストである。North Carolina Competency Testとan exit exam of essential skillsとは、目的が同じでも違うテストである。

そのほか、軍入隊の職業適性検査もあり、軍務に就く、就かないに関わらず、すべてのジュニアの生徒に3時間のテストが課せられたりもする。

以上のようなテスト・システムである。生徒は授業を真剣に受けざるをえないし、教師も学習指導に熱心にならざるをえない。

また、能力のある生徒には、大学へのジュニアからの飛び級や、大学レベルのAPクラスの編成によって、APテストに合格すれば、高校時に大学単位を認めるなど、優秀クラスを作ってさらに能力を伸ばす手だてが講じられている。また、逆に学力の低迷者(North Carolina Competency Testで点数の低かった不合格者)には、それに見合った補習コースに入らせ、基礎力をつけさせる。個別指導の手段を持ち、適切なコースやクラスのレベルに入らせて指導するなど、日本よりはるかに能力別個人別指導が徹底している。

生徒は学習に真剣にならざるをえないし、基礎学力なく入学することは少なくなる。

地域との大学やカレッジとのつながりも深く、生徒は明瞭な目的意識を持ちやすい。大学は、学校現場を支援したり、教師がレニューアルする場所である。一方、学校現場は、所属生徒の教育のためのみにあるのではなく、教育職を志す大学生を教育する機能も持っている。

生徒がいっそう勉学に励むよう、さまざまな報償規定を設け、優秀生や模範生を評価するようにしている。

私の受けた生徒の真剣な学習態度の印象は、以上の制度やシステムからくるものであろう。

実際の進路状況は、全体の生徒数の40%が大学進学、15%が兵役、40%が就職であるという。貧しい家庭の子弟も多いし、生徒能力も多様である。

5 さまざまな活動支援の専門化・分業化

生徒の能力は多種多様であり、進路も様々である。それで能力や進路に合わせたクラス分けや多くの選択教科を設け、様々なカリキュラムを用意している。生

徒自身が適切にコース選択できるよう、さまざまな進路モデルを提示し、マニュアル化しているのである。

進路の悩みが生徒それぞれに異なっているために、相談事は、各学年毎のカウンセラー(Senior, Junior, Sophomore/Freshmanの3人)が引き受けている。日本と違って、進路相談やガイダンスはクラス担任教師の役目ではなく、カウンセラーの仕事である。就職相談も、校内のキャリア・センターに専門職員がいる。また、家庭への連絡・訪問などはSocial Workerの役目である。

学習遅進児、学習不振者、ハンディキャップを持つ生徒を助ける先生もいる。Resource teacherと呼ばれている先生で、スモーキー・マウンテン・ハイスクールにも一人いた。

外部からは、大学関係者が入学募集にやったり、軍関係者が生徒に入隊を勧めにやってくる。他校では、軍人がクラスを持って教えることもあるという。また、警察官が保安のために校内を毎日見回っている。

このように学校活動を支援するためのさまざまな専門職が分業となって存在する。学習指導以外の仕事が専門化され高度に進んでいると思う反面、学習指導担当教師が生徒理解に関係なく学習指導が出来るのか、クラス担任教師自身が生徒の家庭を知らずしてどうして生徒管理が出来るのかという疑問を持ってしまう。

6 教師評価と管理体制

管理者、すなわち教師評価する専門家であり、管理職の免許状も他教員と異なっている。

教師評価、FODI (Formative Observation Data Instrument) と FODA (Formative Observation Data Analysis)を使用する。形成的授業観察データ法(FODI)で授業観察し、それをもとに、形成的授業観察データ分析(FODA)を行い、教師評価をするものである。

その評価内容を見ると、すべて教師の授業における学習指導評価である。そうした評価を毎年3回受け、教師への通知票が渡されると、教師は評価をフィードバックするので、学習指導力がきたえられる。

スモーキー・マウンテン・ハイスクールでは、そうした評価で失格の教師は一人もないということであった。学習指導にたけた教師に生徒は教えられていた。

一般に言って、教師への管理体制は厳しいと言える。生徒の成績は全国レベルで返ってくるので、指導の結

果が明瞭に現れるし、教師の指導チェックも行われるので、絶えず指導方法を反省しなければならない。指導力のない教師がいた場合、辞職勧告は当然あり得る。

学校経営はトップダウン方式で、校長が教育方針を教師に伝達するだけ。教師は要望ができるが、学校の運営に口出しして変更させるということはない。

管理職は、教師への評価を下し、教職員の獲得や学校施設の管理や教育予算の配分や安全面の管理を任せられ、生徒指導に対する最終処理を負わされ、自校理解のための外部へのプロパガンダに努めるなど、総合的な管理責任と経営能力が求められている。

学校は開かれた学校になっている。1セミスター毎にOpen Houseを開き、特に保護者がやって来るが、外部の人々と教師とが話し合いを持つ。また、日本のPTAに相当するPTOもあって、保護者はより多く学校に関する知識や関わりを持つのである。

外部からの査察であるが、建物が消防基準に合っているかは消防署長がやって来て査察するし、州の委員会から、テスト結果、出席状況、退学率、進学率、SAT得点などの評価を受ける。州の委員会は、成果の上がない学校に介入し、場合によっては校長を辞職させる権限を持っている。

生徒は、そうした管理システムの中で学習活動をしている。学習指導上効果的な制度・システムであるが、現実には、そこから様々な生徒指導上の問題が派生するのではないであろうかという危惧も考えられる。

7 図書資料やその他のメディアと学習活動

学校図書館の仕事内容から、スモーク・マウンテン・ハイスクールの学校教育活動の実態を裏づけるとともに、日本の学校図書館の将来をも暗示していた。以下その報告である。

(1) 分類方法

Decimal Classificationという分類方法である。順番が違うものがあるが、概ね、日本十進分類法の分類内容に似ている。

日米の文化・習慣の違いを表しているものとして、分類番号200が宗教になって独立している点である。アメリカでは、開拓時代からの伝統を持ち、宗教への関心度が日本よりも深いということであろうか。

ちなみに、大学では国会図書館分類法を採用している。本の数が膨大であるためである。

(2) 予算

- 3カ所からくる。①US連邦予算
- ②NC州予算
- ③ジャクソン郡

これは、一般的な州の学校教育予算の出所に一致する。予算の対象となっているのは、書籍とソフト、ビデオ、テープなどである。予算配分基準は生徒数による。小中高は同額である。日本では小中高の予算のばらつきが著しい。ここは、生徒数950人であるから、約14,000ドルの予算であるという。年間予算としてはまあまあで、本県の学校図書館と比較するなら、やや多く感じられる。

ただし、コンピュータなどの設置・改善費は別途で、設置台数が多く、メディアセンターとしての機能を持ち、質的にも日本をはるかにしのいでいる。

(3) 利用について

利用については、Open scheduleである。

①教師の引率

あらかじめカレンダーにクラスが来る時間を書き込んでいる。2クラスまで受け入れる。印刷物、コンピュータ、CD-ROMなどを用意しなければならないが、あらかじめ予告してくれる方が用意しやすいという。コンピュータ、CD-ROMなどというのが、日本の学校図書館と違うところで、学校図書館が図書資料の提供のみならず、あらゆるメディアの提供をしているということである。

②生徒の自由閲覧とくつろぎ

新聞、雑誌を見たり、インターネット（電子メール）を使用したり、読書したりする。「生徒がくつろぐ」ことの大切さは日本も同じである。

③図書の貸し出し・録画

図書館は、図書の貸し出しのみならず、ビデオの録画をして、学習教材を作る仕事もあるという。

また、そのほか、学校司書はメディアスペシャリストと呼ばれるようになってきているが、コンピュータの故障の解決もしなければならないので、そのための研修もする。

(4) 生徒の学習活動や教師の学習指導の支援

卒業研究（Senior Project）の結果を評議委員会で発表するとき、プレゼンテーションをするので、そのプレゼンテーションを支援する。卒業研究についてはまた後で述べる。

読書指導について、高等学校では、好き嫌いがはっ

きりしている。高校段階になって読書量を増やすという考え方には米国の職員は疑問を持っている。小学校・中学校段階と高等学校段階とでは、読書指導に対する考え方が異なると考えている。日本では、高等学校で貸出冊数ばかりが問題となって、図書系の教師を悩ませている。

スモーキー・マウンテン・ハイスクールの学校図書館の最大の任務は、カリキュラムにおけるそれぞれの先生方の教科指導を支援するということであった。

(5) 図書の購入

方針 ①賞を取ったもの。

②年間で先生からのリクエスト。

③蔵書分類のバランスで、少ないものを入れる。

④責任者の最終判断。

現在では、ジャクソン郡のメディア・コーディネーターがオーダーの処理をしてくれる。それをもとに、必要なカード、オンライン・カタログを作成している。

州でも学校図書館の部署がある。メディア・サービス・ディビジョンである。CD-ROM、ソフト、本の推薦のリストアップをしている。そうしたものやAmerican Library AssociationのブックリストやSchool Library Journalの書評やブックリストに推薦度量を示す星マークがついているものなどを購入の参考に使っていた。

図書館内部のコンピュータはオンライン化しているが、学生が使用するコンピュータはそうっていない。図書館の本の分類が処理されていないものがあるが、スモーキー・マウンテン・ハイスクールの図書館の職員は移籍してからまだ3カ月しか経っていない。

(6) 評価

高校段階で貸し出し冊数のみを評価することは無意味であるという。小学校はいいが、高校はいかにサポートサービスが出来ているか、その質が問題であるという。そのために図書館評価でも決まった様式というものがあるという。

州議会は校長に評価を委嘱しているので、図書館業務を管理職に理解してもらおうアピールも必要であるという。

以上のように、米国の学校図書館は大きく様変わりしている。従来の単なる図書の貸し出し業務のみなら

ず、さまざまなメディアの提供であり、それに関連する機器の管理業務が付加されている。最大の任務は、学校教育活動、特に、カリキュラムをいかに質的に支援するかであり、量より質が求められている。

さまざまなメディアの提供に変化した背景については、シニア・プロジェクト (Senior Project) のコース生にインタビューした結果にも反映されている。

8 卒業研究 (シニア・プロジェクト)

卒業研究は、英語授業に付随してすべての卒業生に課せられる。スモーキー・マウンテン・ハイスクールでのシニア・プロジェクトに関する調査結果は次の通り。対象生徒は、Pam先生担当の12学年で、調査に応じてくれたのは8名の生徒。

(1) テーマ

テーマは実験や体験や作品などから自分で探す。

調査生徒のテーマは、ムエタイ、ストレス、コミック、ローカル・ニューズペーパー、ナチュラル・ヒーリング、キリスト教と仏教、ドラッグユースの防止。

特にその方面に進むというのではなく、そのときどきの興味に従ったテーマである。どれも日常生活的なテーマで、生徒が自主的主体的に決定する。

(2) 解決手段

解決手段は、インターネット、手伝ってくれる地域の人、雑誌、父親、体験など。

テーマが日常生活の関わりの中で探されているので、こうしたテーマの解決手段としては、図書資料のみに頼れない。インターネット、最新のことが書かれた雑誌、自己の体験や観察やインタビュー、経験者の協力などである。

したがって、学校図書館が役割・機能を十分果たすためには、従来の図書の貸し出し機能のみではなく、あらゆるメディアの提供と設備利用の機能に拡張しなければならなくなる。

(3) 評価

5人の評議委員 (先生2人、地域の人3人) が評価を下すという。

対象とする事項は、スピーチ、体験活動内容、レポートである。評議委員に地域の人が混じっているという点が注目される。また、学校図書館もメディアセンターとして支援をしている。

(4) 担当教師の役割

担当教師は英語教科の教師で、2回原稿を提出させ、

1回は作文のチェックをする。最終的には成績をつけるという。

(5) 生徒自身の問題点

11年生までは教師が教えてくれたけれども、12年生になって生徒自身がすべて解決させなければならないので、最初は戸惑いがあったという。生徒はチャレンジ精神で難問に挑むという。つまり、11年生までは、教師がどんどん教えて学力をつけさせる授業で、意外に日本的であるように思う。

このように、生徒の多様な学習テーマのニーズに応えるためには、学校図書館の役割や機能をメディアセンターとして拡張させるとともに、地域の人々の協力や文化財産・地域資産・自然遺産などの活用が大切であるということが分かる。

IV 今後の展望と教育改革

1 異文化理解の指導命題

スモーキー・マウンテン・ハイスクールで、日本から同校を訪問した英語教師やコーディネーターの先生に通訳してもらいながら学習指導を直接させてもらった。その結果として得られた異文化理解の指導命題について述べる。

渡米前に研究しておいた異文化理解に関する指導上の命題（仮説）を持っていた。それは次のようなものであった。

「生徒が、異文化を自分の知識としたり、積極的に考えていくためには、意外性であったり、比較できるものが自分にあたり、与えられたりすることである。

したがって、教師は、テーマにつながる題材やデータを選択して、意外性や比較意識に訴えながら指導することが効果につながる。」

さまざまな授業を実際にやってみて、予想外だったことがあり、上記の命題を修正したことを述べる。それに関わる主な体験内容は次の通り。

画像を見せて季節あての授業をした時のことである。桜の写真を見せた時、生徒はどの花かが分からないので、季節が判断できないということであった。

ノースカロライナでは、開花する木の花の種類も豊富であり、花をよくよく見ない限り一種類に特定することはできない。一方、日本では、「花」といえば一種類に限るという特殊な伝統文化を持っている。ノース

カロライナの州花で西洋ハナミズキがあるが、日本の桜花はそれとも性質が異なっている。物事に付随する特殊な伝統文化は見えないものであるが、日本の桜は、その伝統文化が人々の心に深く根付いている。特殊な伝統文化が付随する物事を異文化として指導する場合は、注意を要する。それが思いこみ、ドクサを生むからである。指導の際には、付随する特殊な伝統文化をいったん排除しなければならないし、それをまた異文化として認識させなければならない。

クリスマスと正月とは、一年中のもっともよき日として、互いに類似している。日本では正月を独立した季節に立てる。そのことの理由説明として、クリスマスを引き合いに説明出来る。

ある英語コースで、男子生徒が帽子に「虎」という漢字が入っているものをかぶっていて、これは何の意味かと尋ねた。長く持ち続けた疑問が解けた喜びというものを感じた。「虎」を説明するだけでなく、「とらんむり」という部首とそこから派生する漢字の例を教えることが効果に結びつくようである。日本の文字の中で、特に漢字については興味・関心が深いと感じた。

意外性については、意外なままでは自分の知識にならず、その意外性が理解され納得されて感動を与えることがある。意外性を持つ教材には、生徒の質問を予想した論理の明快な答えを用意しておくことが大切である。

看護コースで日本人の動作や考え方の違いを教えたが、その授業最後に、日本の患者には、折り鶴を一つ折ってあげるとよいですよと言って、折り鶴を折って見せた。なぜ、病人に鶴なのですか、という質問が出た。「鶴は先年、亀は万年」でこれらは長寿でめでたいという説明をすると、納得してくれた。後で、男子生徒数人が折り鶴を学びたいと申し出てきた。また、放課後、女子生徒が図書室で、折り鶴がよかったと言ってくれた。折り鶴を折って出したのは効果的であった。

「遠慮」の習慣などは、日本人間でもときどき誤解があるので、あいまいになり、明快な論理で説明できない場合は避けた方がよく、教材選びは慎重にしなければならない。

教師側から「学校の先生を尊敬する習慣について」の質問が出た。これは州の「優秀な学校となるためのノースカロライナの戦術計画」の中で、「生徒、教師、管理者、両親の相互の尊敬」というのがあげられてい

る。そうした教師の意図を感じる場面が何度があった。

答えとして、東洋には指導者（孔孟など）への尊敬の伝統があることを述べた。アジア、特に中国の古代の偉人達の教えや逸話を学び、敬うことから教師への尊敬は伝統になっているという説明をした。これなども生徒に納得されたように思う。

要するに、万国共通の異文化理解の手段は「論理」であることをあらためて知った。

以上から、異文化理解における指導命題は次のように修正される。

「生徒が、異文化を自分の知識としたり、積極的に考えていくためには、意外性であったり、比較できるものが自分にあたり、与えられたりすることである。

ただし、意外性については、説明すべき明快な論理が潜んでいなければならない。また、比較的できるものが多くて絞れない場合があることや、自国の伝統文化との違いに留意しなければならない。

したがって、教師は、テーマにつながる題材・データを選択し、また、疑問とするところを取り上げ、意外性や比較意識に訴え、自国の伝統文化との違いに配慮しながら、五感的な手段で明快な論理で指導することが効果につながる。」

2 カリキュラム編成上の参考点

学校が学習活動という本来の姿を取り戻し、生徒が自主的主体的に学習活動に取り組むためには、全体的には最低の基礎基本を押さえ、個別的には能力や適性に応じて指導し、多くの選択科目を設定することである。

また、教師が多様な生徒に対処するためには、様々なケースを取り込んだマニュアルを作っておき、それを現実問題としてさらに柔軟適切に使用することが大切になってくる。

平成15年度からの新指導要領に基づく教育課程の編成上、参考になったこともある。

特色ある教育課程とするため、学校設定科目を設けてよいことになっているが、スモーキー・マウンテン・ハイスクールでの次の科目は、日本の高校でも検討の余地がある。

卒業論文 (Senior Project)

新聞

学校誌 (Year Book)

演劇 (ミュージカル) (Play Production)

トピックス (Selected Topics in Learning)

写真

図書館学 (Library Science)

などである。

トピックスなどは、小論文対策としてすぐにも国語科や社会科で実行可能である。

また、学校誌についても実現可能な科目である。徳島県の全高等学校が自校の学校誌を毎年発行している。となく教師主体で負担加重であるのを、生徒主体で選択授業として日の目を見るものに改めるのはどうであろうか。新聞同様、企画、取材、記述、編集、写真技術、情報処理など、学年の枠を払った総合的な学習ができる。

3 わが国の教育改革について

生徒が学校本来の姿を取り戻すためには、やはり教育改革の果たす役割が大きい。

ノースカロライナでは、州の新ABCs政策によって小中高が一貫してアチーブの成績を上げようとしている。3年生、5年生、8年生、高等学校と、学習基礎能力の関門を4つ設けている。

日本の高校教育を腐敗堕落させているものは、とりもなおさず、social promotionである。規定では点数の足りない生徒を落第させることになっているものの、現実にはそれほど厳密なものではない。国語、数学の極端に低い（零点の場合がある）生徒が、高校の入学定員の枠でパスし、入学してきて、入学後はその事を取り上げず、手当を受けないまま、高校の教科学習をさせている。

日本では、高等学校入学学力検査という全県テストがあるのであるから、まず、これを生かすことが教育改革につながるのではないか。

国語、数学などの極端に低い生徒をチェックし、補習コースを編成して、基礎学力のレベルアップに必要な措置を講じなければならない。基礎学力の最低レベルのクリアを高校卒業条件の一つとするのはどうであろうか。そのためには県の教育委員会の最低限の介入が必要である。

学校は、本来学習指導の場である。教育本来の姿を取り戻すための手だてを真剣に考えなければならない。今の本県の教育改革基本構想は構想として納得しえても、現場の深刻な問題を具体的に解消する方策が感じられない。解決し得ない教育諸問題を現場教師に責任

転嫁させ、文面だけの教育改革に終わる可能性がある。生徒に選択の自由と責任とを持たせる具体策を取らなければならない。

また、「総合的な学習の時間」を実施するに当たっては、学校図書館業務の質的な改善が問題になる。図書資料のみの提供ではなく、学校のすべての教育活動を支えられるよう、あらゆるメディアの提供を図ることが出来るようにしなければならない。学校図書館への生徒の使えるコンピュータの導入が不可欠である。

現状の縦割り行財政を改め、学校教育活動に直結した学校図書館の新たな認識から予算を再編すべき段階にある。

学校内部の情報処理の特別教室には、米国をしのぐほどのコンピュータを有しているにもかかわらず、情報担当者以外のほとんどの教師は、コンピュータを使用できるようになっていない。わが校でも、情報機器

を活用できる職員とそうでない職員との教育活動の質や意識にも格差が出始め、デジタル・デバインドが深刻である。ノースカロライナの学校では、教職員・生徒の誰でもコンピュータを扱うことが印象的であった。

今回のノースカロライナへの学校訪問は、日本出発のぎりぎりまで電子メールのやりとりであった。電子メールがなければ国際理解教育が不可能であるという認識も不足している。学校管理者に情報に対する認識がない限り、教育改革も前途多難である。

おわりに

ノースカロライナへの学校訪問を可能にさせていただいたプロジェクトの関係の先生方に深く感謝したい。

また、この訪問が無駄にならないために、もっと広くこの成果を報告したい。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2000年3月27日 - 4月4日)

鳴門市立鳴門工業高等学校 教諭 森田 浩之

3月27日 (月)

WCUグループは、午前中 North Carolina Center for the Advancement of Teaching (NCCAT) および Fairview Elementary School を訪問した。

NCCAT はノースカロライナ州の教師のリフレッシュメントを行う施設であり、希望者の中から一定の人数が選ばれて研修を受けている。この施設は全米の教師コンテストで第1位となった教師の提言に基づいてつくられたものである。一教師の発案が現実のものとなったところにアメリカらしさを感じさせられる。そこは教師の心身のリフレッシュを行い、新しい教育手法についてのアイデアを得る場となっている。建物の内部には、会議室・研修室・視聴覚教室・図書室・食堂など各種施設の他、トレーニングルームまで備えられていた。日本の研修施設が文字通り研修を目的としているのとは趣を異にする。建物の内部には、州の著名な芸術家の作品が多く飾られていた。リフレッシュを行う場としての環境づくりに注意が払われている。

スライド資料を用いながら、アメリカの教育全般についての説明を受ける。アメリカでは州ごとに学習指導要領が定められているとのことであった。しかし教科書出版社に限られること、ひとつの州のやり方が他に波及していくこと、さらに全米共通のテストが実施されることなどのため、ある程度標準化が進んでいるとのことであった。また、アメリカでは教員以外の職員の割合が多いことが大きな特徴となっているとの説明があった。学校業務の分業化が進んでいる。教員はもっぱら学習指導に力を入れて仕事に取り組める体制となっている。

Fairview Elementary School では、教室レイアウトの特異性にまず注目させられた。音楽教室は円形、その他の教室は円グラフを扇型に分割したような構成となっていた。後者では隣の教室の様子がわかるような状態である。もっとも、アメリカでもやはり通常の四角い校舎の方が多そうである。教室内部は、各種の掲示物や教材によりたいへんカラフルである。“Together We Make A Difference” など、人種の違いを乗り越

えて共に歩もうとの標語がアメリカであることを感じさせる。“Our School, A Great Place To Learn” など、ポジティブな標語も。教室を視察したあと、体育館で子供たちからフォークダンスにより歓迎を受ける。みな明るく屈託のない様子で、楽しく踊って見せてくれた。日本人教師も子供たちから踊り方を教えてもらう。その後野外活動の取り組みや、インターネットを活用した環境問題への取り組みについて説明を受ける。生徒・保護者・教師が一体となって、実践的な野外教育を行っていた。プラグマティズムの国であることを感じさせる。また、8年生が測定した水質データなどを環境問題に関する国際的なHPにインプットして、環境問題に寄与している取り組みを見せてくれた。このようなコンピュータやインターネットの活用は、さすがにその分野の先進国であると思わされた。

グループは、午後から Smoky Mountain High School を訪ねた。そこで見聞したことの中では、生徒の半分以上が自家用車で通学しているということ、進路指導のための部屋やスタッフが充実していること、随所でコンピュータを利用した教育が行われていることなどが印象的であった。進路指導に関しては、各学年に専門のカウンセラーがついている。

テレビによる授業システムが備えられている教室があった。これによりウェスタンカロライナ地区の9高校がいちどきに同じ授業を受けられるようになっている。各教室を見てみると、いろいろな教材や飾り付けによってたいへんカラフルである。日本の教室とは雰囲気が違う。生徒のやる気を喚起するような標語が掲げられているところも多く見受けた。次に機械や建築など、職業教育が行われている実習教室を見学した。このような専門分野の職業教育に関しては、日本の方が例えば工業分野なら工業高校に設備やスタッフが集中しているため、より専門的で高度なものが備えられていると思った。

図書室で簡単な歓迎会があった。図書室の規模は日本とあまり変わらないと感じたが、そこにもやはり10台程度のコンピュータが置かれている。

Smoky Mountain High Schoolには、地域の生徒がほぼ全員集まってきている。同地では地域ごとに行くべき高校が決められており、ごく一部の例外を除いて、学力や能力に関わらずみなが同じ高校に通うこととなっている。様々な障害を持つ生徒たちも来ている。これは1972年に制定された法律で、能力の優劣や健常者であるかないかを問わず、みな地域と同じ公立学校に通うことが定められたことによる。一方同校では、941人の生徒のうち250人が学業優秀なハイクラスに入っており、そのほとんどが大学に進学するとのことであった。

3月28日（火）

筆者は Tuscola High School を訪ねた。各担当者より説明を受ける。教頭が二人おり、一人が女子の生徒指導、もう一人が男子の生徒指導を受け持っている。出席状態に問題がある生徒は、土曜日に課題を行わせている。スクールバスは9台あり、中学校と協力して相互の生徒の送迎を行っている。授業は生徒が自分の進路希望に合わせて適切な選択授業を取ることができるよう、カウンセラーがアドバイスを行うシステムとなっている。9年生から12年生（小1から1年生と数えて）の4学年があり、上の学年に行くほど選択の授業が多くなっている。当校においても地域のあらゆる生徒を集めているため、教育内容や設備も多岐に渡っている。校内では車椅子の生徒を他の生徒が押している姿を見受けた。ボランティアの生徒が協力しているとのことであった。どのような生徒もそれぞれに向上させていこうという雰囲気を感じる。知的障害者の教室では、彼らが作業の練習をするための教材を見せてもらった。その一方で、オールAの成績優秀者を写真で張り出したりもしていた。校内は清潔で好印象を持つ。各教室を見た中で、黒板の代わりにコンピュータディスプレイを兼ねるスクリーン状ディスプレイを導入している教室が大変興味深かった。その主である社会科教師は、私費を投じてコンピュータ機器を導入しているという。インターネットで取り込んだ絵などを、パワーポイントを用いて授業で活用している。ビジュアルで効果的な方法である。またそのディスプレイは、指で表面をなぞると字を書くことができるので黒板代わりになるし、そのデータを保存することもできるなど、たいへん便利なものであった。他にもイン

ターネットを利用した教師の取り組みについて説明を受けた。やはりコンピュータの有効活用という点では、日本より一歩も二歩も先んじている。

3月29日（水）

Tuscola High School 単独訪問2日目。学校到着後、Plus というクリーニングおよびユニホームレンタルの会社に案内される。そこで各校進路指導担当者の会議が行われ、筆者も出席したが、内容に関しては十分に聞き取れなかった。Plus では20才代半ばぐらいの Tuscola High School 卒業生が人事課で働いており、彼が会議で会社側を代表して説明していた。また会議後、社内を案内してくれた。クリーニング設備を見て回る。なお Tuscola High School からは、進路指導担当者と、筆者を4日間に渡り案内してくれた Lead Teacher の Cathy Walsh が参加していた。生徒の進路指導のため会社訪問や工場見学を行うことは、日本でも行われている。実地に見るということは非常に大切である。日本の同様の設備と較べてさしたる違いはないのかも知れないが、これまで見たことのないような施設を見学するというのは大変興味深いことであった。

午後に入って、Tuscola High School の近隣高である Pisga High School を訪れる。同校のオフィスをボランティアで補佐している生徒に案内を受ける。アメリカの高校では、生徒を校内の様々なボランティア活動に参加させている。生徒の自主性を涵養する意味で、とてもよいことであると思う。また、自主自律がアメリカ社会の特徴であることを実感させる。Pisga High School では、まず美容師のコースを学ぶ生徒のための施設に案内された。日本の教室が2～3個人入るほどの大きな実習室には、ありとあらゆる機器や化粧品類が並んでおり、大変立派なものであった。なお、隣の Tuscola High School には同じような設備がないため、Tuscola High School の美容師希望の生徒が、日を決めて同校に学習に来ているとのことであった。次に機械コースの設備を見学する。旋盤・フライス盤・切断機など、日本の工業高校に備えられているのと同様の基本的な加工機械がそろえられている。しかしひとつの学校における機械コースの設備であるため、日本の工業高校のようにあれもこれもたくさんの設備が備えられているわけではない。スタッフにしても、日本の方が一校に多くの専門家がそろっている。このよう

に、施設やスタッフの集中度の面からは、日本のように高校を分野別に分けている方が有利である。しかし、それが高校の序列化につながっているのは大きな問題点である。低位にランク付けされている学校に来ている生徒の学力の低さや、やる気のなさは、目を覆うばかりである。(ただしこの問題の根は、義務教育段階での教育のあり方に負うところが大きいと考える。)対してアメリカでは、地域の全ての生徒がひとつの高校に集まってくるため、どのような生徒もそれぞれに向上していこうという意識を持つよい面があると思われた。

Pisga High School からの帰り道、Cathy 先生がコミュニティーカレッジに案内してくれた。車に乗ったまま校内を一巡しただけであったが、まずは丘陵地帯のゆったりとした緑の敷地が印象的であった。コースごとに敷地内の各所に建っているそれぞれの建物自体は、大学と較べるとこじんまりとしている。コミュニティーカレッジは2年生の短期大学のようなものであるが、内容的には専門的な職業教育に比重が置かれており、その点では日本の専門学校に近いものがある。

3月30日(木)

Tuscola High School 3日目は、広島大学付属東雲小学校の宮本真由美教諭とともに訪問することとなった。午前中しばらく、筆者が宮本教諭を校内各所に案内して差し上げた。各教室を巡って感じることは、やはり生徒の人数の少なさである。授業にもよるが、20人以下のところが多い。教室のサイズもこじんまりしたところが多く、机の並び方も日本のように碁盤の目状とは限らない。中央を開くような形であったり、左右に別れて斜めに前に向く形であったりする。人数が少ないということで、アットホームで親密な雰囲気醸し出されている。また授業によっては、生徒ごとに違う課題に取り組んでいる場合もある。より生徒個々の関心や能力に応じた取り組み方がなされている。

ある教室で、数学の臨時教員と話をした。彼女は正式な教員になるべく採用試験を受けるとのことであったが、合格率について聞くと75%程度とのこと。日本よりかなり通りやすい。ということは、アメリカでは言われているように、日本と比較して教員の社会的地位や待遇があまりよくないということなのだろうか。次に元軍人の職員と話をした。彼は軍事教練のようなことを受け持っているようであったが、実際のところ

は見えていないし深く聞かなかったのでよくわからない。いずれにしても、日本の学校では考えられないことである。彼の部屋には、アメリカ国旗や軍服らしきものが並べられていた。図書館に入ってみると、広くて清潔で、例によって何台かのコンピュータが備えられている。数学のあるクラスを見たところ、OHPを2台用いていた。スクリーンもはじめから教室のホワイトボードの上から出てくるように備え付けられている。テレビやビデオデッキなども備えられている教室が多い。筆者の学校に較べるとずいぶん充実している。予算上の問題はさておいて、各教師がその教室を拠点として生活し、授業をしているということが、教育機器や教材の充実につながっているのではないだろうか。機器の管理面でも有利である。また、基本的に教員の異動がないということもプラスに働いている。

多くの教室にはコンピュータが備え付けられている。学校職員の中にはコンピュータエンジニアもいる。インターネットの活用、情報教育、各種アプリケーションの活用など、コンピュータが随所で活用されており、コンピュータ先進国の実感を抱く。生徒が高校卒業資格を取るのにも、コンピュータに関する試験に通る必要がある。それほどまで深くコンピュータが学校に溶け込んでいる。ひとりの人間のできることや、関わる世界を大きく広げていくことのできるコンピュータという文明の利器について、日本の教育も早急にアメリカに追い付いていく必要があると思った。

化学の授業では、珍しく寝ている生徒を見た。その生徒は前日夜更かしするなどの原因があったようである。いつも寝ているわけではないと同じ教室にいた生徒が言っていた。翻って、筆者の授業ではもっと寝ている者が多い。どうしようもないような現実がある。Tuscola High School の生徒の方がその点でははるかに正常である。次に十数名の少数で行っている数学の授業を見る。席は円形に囲むように並んでいる。それからはずれて一人だけ別のところで勉強している生徒は、優秀生徒で自学自習をしているとのことであった。その方が自分にとってよいと判断したので、教師がその判断に任せたとのことであった。少人数教育ならではの柔軟な対応である。羨ましく思われたし、生徒にとっても幸せなことである。そのほか同日には、建築用CADの授業、建築コースの煉瓦積みなどの実習、家庭科の調理実習などを見て回った。その後Cathy先

生に案内されて、モヒカン刈りの生徒に会った。「ぜひ見せたかった」とのこと。モヒカン部分が赤く染められている。ことほどさように服装や髪型は自由である。日本では制服や髪型の指導に多大なエネルギーを要し、しかもそれがしばしば教師と生徒の信頼関係を阻害する要因となっている。考えさせられるところである。

その日最後に、筆者があるクラスで30分ほど授業を行った。内容は鳴門工業高校の学校生活を写したビデオの上映とその説明、産業教育フェアの様子を写したビデオの上映とその紹介などである。生徒は静かに興味深そうに見ていた。最後にいくつかの質疑応答を行った。

3月31日（金）

再び単独で Tuscola High School を訪問する。前日同様の授業を計3時間行う。どのクラスでも生徒は関心を持って見聞きしてくれた。英語の授業を見学する。生徒によって課題とするテキストが異なっていた。そのクラスには生徒が10人しかいなかった。少人数ならではの個別教育である。なおそのクラスの教師は、日本の俳句とヨーロッパの印象主義絵画を統合したような詩を創り出そうと試みているそうである。

同日夕刻ホームステイ先に向かう。

4月1日（土）～4月2日（日）

ホームステイならびに観光地巡りなど。

4月3日（月）

G. P. S. P. 一行は Exploris 博物館および博物館付属の Exploris Middle School を訪ねた。まず博物館の見学を行う。グローバルな視点と、社会との関わりを持った展示物が特徴である。また、他の国の民族や文化の紹介、節水意識を持たせるための水に関する展示物など、教育的な視点を持った展示を行っている。Exploris Middle School は、一学年50～60人の少人数教育を行っている実験的な学校で、生徒自身に自己の学習目標を持たせるとともに、結果についての自己評価を行わせているところに大きな特徴がある。2週間ごとに目標設定と自己評価を行わせている。そのためチェックシートには、多面的に自己評価を行えるような様々な評価項目が設定されていた。自分で立てた学習目標に向けて自律的に取り組んでいくようなシステ

ムとなっていた。それとともに、生徒個人の人々の能力や個性に応じた取り組みができるようになっている。英語の授業を見学したところ、生徒ごとに異なる本をテーマにレポートを書いていた。これは少人数指導を行っているからこそできることである。教員数をできるだけ多く確保するため、同校にはカウンセラーや校長がいない。対生徒教員数比は、通常の2倍となっている。また、教科指導は数学などに関しては系統的な従来の形式の授業が行われているが、その他に関しては総合学習的な指導を行っている。同校は入校希望者が多く、抽選で入学者を決めている。そのため入学段階では母集団となる生徒全体の傾向が反映されており、特に優秀な部分だけを優先して集めているというわけではない。しかし充実した指導の成果で、生徒の学力的な伸び率は州のトップテンに入っているとのことである。やはりひとクラスのサイズは、教育の質に大きく関わってくるとの思いを強めた。少人数のクラスは、40人ひとクラスとは別世界の、親密で豊かな空間である。

G. P. S. P. 一行は、午後州の教育委員会を訪れた。ここでは NCWISE OWL や、ABCプログラム、ABCプラスなどについて説明を受けた。この中で、ABCとは教師と生徒の両者に学習の責任を明確にさせ、なおかつその伸びの目標を設定し、随時チェックを入れていくというプログラムである。成果達成時には報奨金が与えられる。このプログラムにより全米をリードするような成果が上がっており、メディアにも取り上げられているということであった。アメリカらしい直截的な方法である。実施することに対していかに効果が上がるようにするかということについて、日米で大きな違いがある。アメリカは実利を重んじ、じかに効果の上がる方法を躊躇なく採用する。日本においては、教育に関して結果を数値化し、比較検討するという機会は成績処理などに限定されている。デジタル化できないものとか、人間的な内面の涵養という側面のほうが本質的に重要であると考えられている面もある。しかしアメリカでは様々な評価システムが備えられていたり、全米共通テストが行われたり、さらには教師のコンテストがあったりと、成果の有無が具体化され、比較されることが多い。このようなことは、効果的であると同時にたいへん厳しいことでもある。日米の文化の違いといったことを考えさせられる。次に印象に残った話として、生徒のアチーブメントが低くても進

級させてやるといった傾向を改め、進級に当たっては最低限の学業実績を要求すること、その代わり生徒に対する助力も強めていくということがあった。手間は掛かるが、これも実効を追求する方法である。日本では、成績不良の者でも恩情をかけ進級させてやるといった甘い傾向がある。これを改めていくには、その保証となる体制を組むことが同時に必要である。容易なことではない。2003年からは、代数・アメリカ史・英語・生物などに関して基準をパスしなければ、高卒資格を与えないという話も聞いた。これもまた効果的かつ厳しい方法であると言えよう。生徒に自己責任を認識させる上でも有効である。また、授業の展開方法について、総合学習的に行うのか、それとも従来のように学習の核となる部分を系統的に学ばせていくのか。このことについて長年の議論があったということである。結局は前者の方がモチベーションを持たせられることからより効果的であるという結論となっている。具体的にどのように取り組まれているのか、興味深いところである。

4月4日(火)

日程の最後は、Exploris博物館でのサマリーコンファレンスであった。アメリカの教育研究家の講演のあと各グループが発表を行った。筆者はWCUグループの中で、生徒や教師に対する様々な評価システムに関し

て発表を行った。アメリカでは教師も生徒もいろいろな形で頻繁に評価ないしは自己評価が行われるようになっており、現状認識を明確にさせたり、絶えず教育活動の成果が問われたりするようなシステムとなっている。そのことについて英語で説明する役割を担った。後ほど思ったことは、「実践・効果・評価」が、アメリカ社会を解くひとつのキーワードたり得るのではないか、ということである。

以上。

なお以下に各校を回って目にした標語のうちからいくつかを掲げておく。

Together We Make A Difference

(Fairview Elementary School)

OUR School, a GREAT place to LEARN

(Fairview Elementary School)

You never know how much you can do until you try.

(Smoky Mountain High School)

Never settle for less than your best.

(Smoky Mountain High School)

Today is the day you make your choices for tomorrow.

(Tuscola High School)

Your "I Will" is more important than your I. Q.

(Tuscola High School)

日米の教育の異質性についての研究

鳴門市立鳴門工業高等学校 教諭 森田 浩之

(1) はじめに

日本の教育とアメリカの教育の異質性を研究することによって、日本の教育に生かすべき内容を明らかにしたいと考え上記のテーマを設定した。具体的な比較の観点としては、

- ①学力・能力が異なる生徒に対する教育上の配慮や工夫について。
- ②学習指導要領のように統一されたカリキュラムの基準があるかどうか。また、個々の教師の裁量はどこまで及ぶのか。
- ③生徒に対する学校・社会・家庭それぞれの役割分担について。

などである。

なお自明のことながら、ここで言うアメリカとはノースカロライナ州の一地域での経験を元に述べているのであって、必ずしもアメリカ一般に当てはめられるものではない。

(2) 研究報告

① 学力・能力が異なる生徒に対する教育上の配慮・工夫について。

ここでは主として筆者が4日間訪れたタスコラ・ハイ・スクールでの経験を元に述べることにする。

当地の高校が日本の高校と最も異なっている点は、地域の生徒を全てひとつの高校に集めているという点である。特殊教育を受ける者、職業教育を受ける者、大学進学を目指す者など、ありとあらゆる能力と進路希望の生徒がひとつの学校に通っている。特殊教育を受ける生徒に関しては、その障害の程度に応じてさらに教育内容が分けられている。アメリカでは、どの生徒も同じ学校で学ばせるということに強い意識を持っている。1972年には、すべての生徒に公教育を受けさせるという法律が制定されている。感心させられたことは、健常者が障害者の授業をボランティアで補助していたり、車椅子を押す生徒の姿を見受けたりしたことである。人種の違いも含めて、学校がお互いの違いやハンディを乗り越えて共同する実践の場となってい

る。

一般の生徒に関しては、自分の進路希望に応じて授業を選択するシステムが徹底されている。例えば自分が大学の工学部に進みたいとすれば、将来受験上必要とされる内容や、大学での学習の準備として学ぶべき内容から、代数学・微積分学・物理等々、選択すべき科目が自ずと決まってくる。日本と較べて選択科目の割合が多いので、生徒ごとにどの授業を取っているのが相当異なってくる。その点では日本の大学に近いものがある。従って生徒はクラス単位で授業のまとまりをつくるのではなく、主として授業ごとに集団を形成する。また、生徒がその進路に応じてどの科目を選択すべきかについては、専門のカウンセラーが相談に乗るシステムとなっており、十分な配慮がなされている。

職業教育に関しては、生徒の希望に応じた多様な専門教育を実現するため、学校の実習施設もバラエティに富んだものとなっている。機械、コンピュータ、電子機器、保健・衛生設備、建築関連、美容関連等々、多種多様な設備が備えられている。なお美容師希望の生徒に関しては、タスコラ・ハイ・スクールに十分な施設がないことから、特定の時間に隣のピズガ・ハイ・スクールに出向いて実習の授業を受けるシステムとなっていた。

多様な進路を目指す生徒に対応するため、進路指導課には専門の職員が4人も配置されていた。教師が他の仕事と掛け持ちで受け持っている日本とは大きな違いである。この例のように、授業を受け持つ教師と、それ以外のカウンセリング・事務処理・コンピュータエンジニア・その他専門職とが明確に分業化され、教師以外の職員比率が高いのがアメリカの高校の特色である。教師はもっぱら授業でいかに生徒の学力を高めるかに腐心している。このことは、授業において教師が生徒個々人のニーズにより細かく対応していける条件があることを意味している。

当地の高校では地域の全ての生徒を集めていることから、それに対応すべく幅広い教育内容と設備が用意

されている。日本のように普通科、商業科、工業、農業、水産といった分野ごとに学校が別れ、得てしてそれが生徒のランク分けに通じているのとは大きく異なっている。そのため、生徒がそれぞれの能力や希望に応じて自分のベストを尽くそうとする姿勢が醸成されている。教師も生徒のよりよい自己実現のため、真摯に自らの役割を果たそうと努めている。さらに先にも述べたような、特殊学級の生徒が一生懸命に作業を行い、ボランティアの生徒がそれを助けている姿などは、どの生徒もそれぞれがベストを尽くさなければならないのだということを、問わず語りに語りかけているように思われた。

それぞれの生徒に応じた指導という観点から見てもう一つ興味深かったことは、同じ授業の中でそれぞれが違った課題に取り組むという場面が多く見られたことである。例えばタスコラ・ハイ・スクールのある数学の授業において、優秀な生徒が他の生徒とは別に自学自習に励んでいた。指導教師に尋ねてみると、それは彼がそのようにした方が自らのためになると考えたので、その判断に任せたとのことであった。また、英語の授業において生徒ごとに異なる本を使用して、その感想文やレポートを書くなどのことも行われていた。このように生徒ごとに異なるテキストを用いるという形態は、ローリー市のエクスプロリス・ミドル・ハイ・スクールにおいて最も特徴的であった。同校はひとクラス十数名以下の少人数で、生徒ごとに目標を持たせるなど実験的な取り組みの行われている先進的な学校である。同校では、生徒個人に自らの学習目標を立てさせ、結果についても自己評価させるということが徹底して行われていた。生徒の自主性を引き出すこのような取り組みは、少人数で教師がそれぞれの生徒に丁寧に対応できることから可能となっている。

なおタスコラ・ハイ・スクールでは、選抜された一部優秀生徒に関して、州の学力コンテストへの出場のため、放課後に特訓が行われているとのことであった。他の高校でも同様のことが行われているようである。またスモーキーマウンテン高校では、全生徒941名中250名が学力の高いハイクラスに所属し、そのほとんどが大学に進学するとのことであった。このように、「能力に応じて」ということは、上の生徒をより伸ばすという面でも熱心に取り組まれている。

翻って筆者の日々の教育実践を省みたとき、個々の

「能力に応じて」ということはほとんど実現できていない。一人で30人以上の生徒をいちどきに相手をしなければならない現状では、「全体平均若しくは全体平均以下に合わせて」授業を行う他はない。これは教科が機械で、数学などと違って次々と新しい知識を教えていくという教科の特性も関係している。しかし本質的には、ひとクラスの人数の多さなど、学校が多様な生徒に同時に対応していくシステムになっていないことに原因がある。日本ではひとつの授業では基本的にみな同じことをしていかなければならない。アメリカでは少人数であることや、教師がもっぱら授業のために自らの労力を割けることから、内容によってはかなり柔軟な取り組み方をしている。羨ましい限りである。生徒にとっても幸せなことと言ふべきである。今日日本においては、また本校においては、生徒の多様化が一層進み、全ての生徒の学力を保證するような授業が難しくなっている。大きな学力や意欲の差、態度に問題のある生徒の存在などため、40人の生徒を相手に一律に授業を行ったのでは、一部に対してしか効果が上がらない。このことから、クラス的大幅なダウンサイジングを行っていくことが切望されている。一人ひとりの生徒に目が行き届きやすいようにすることは、教育の質を上げる上で最も効果的なことである。学級崩壊に表徴されるような教育上の諸問題を抱えているわが国が、諸外国に較べて圧倒的多いひとクラスの人数を早急に縮小するの でなければ、そのつけは早晩やってくるものと知るべきである。というよりは、残念ながらすでに大きな代価を払わされてきているように思われてならない。

② 学習指導要領のように統一されたカリキュラムの基準があるかどうか。また、個々の教師の裁量はどこまで及ぶのか、について。

この問の答えは、州単位で学習指導要領が存在し、個々の教師はそれに基づいて創意工夫を凝らしながら授業を進めている、ということになる。NCCAT (THE NORTH CAROLINA CENTER FOR THE ADVANCEMENT OF THEACHING) を訪れたとき担当者から伺った話では、合衆国政府の中には全国共通の学習指導要領を策定したいとの意図が働いているそうであるが、実際には州単位の自治を重んじるアメリカの法体系がそれを許さないとのことであった。しかしながら、教科書をつくっている出版社が全米でいく

つかに限られていること、またひとつの州で策定した学習指導要領が他の州にも波及していくことなどから、どの州も自ずと似たような内容になっていく傾向があるとのことであった。

なお高校では州統一の学力テストが行われているので、そこでよい成績を取るためにも学習指導要領に沿った内容を履修させていく必要が生じている。

日本の場合、学習指導要領がしばしば社会的な論議的となっているのは、社会科の教科書検定の問題に見られるように、政治的な色合いがそこに織り込まれる傾向があるからである。また、落ちこぼれをつくるような詰め込み教育が問題とされるからである。今回それらの問題について相互比較し得るような情報はあまり入手できなかったが、概してアメリカの場合は実際的な効果を追究する、すなわち政治的な意図などとは関係なく、いかに生徒の学力高めていくか、ということを直截的に追求しているような印象を持った。なお別の資料によれば、学習指導要領にはこと細かく学ぶべきことが指定されており、教師はそれに忠実に従って授業を展開していく必要があるとのことであった。

このように、アメリカでも授業は学習指導要領に従って展開されているが、実際の授業においては各教師が大いに創意工夫を凝らしていることは言うまでもない。コンピュータ機器の活用・実物や模型の活用・各種の機器や設備の活用など、生徒によりイメージをつかみやすくするような工夫が随所に見られた。各教師が拠点となる自分の教室を持っており、生徒が授業ごとにそこに集まってくるという形態のため、各教室には教師により様々な機材や教材が導入されている。タスコラ・ハイ・スクールのある社会科教師は、個人的に投資して自分の教室に最新のコンピュータ関連機器を導入していた。そこにインターネットから取り込んだ資料や写真を載せて、ビジュアルで興味を持てる授業を展開している。また多くの教室には、生徒のやる気を喚起するような標語や、星条旗その他のディスプレイが飾り付けられていて、とてもカラフルである。またどの教室にもテレビやビデオデッキが用意されており、教育機器が活用しやすい状態になっていたことも印象的であった。自分の教室を持っているということによって、それぞれの教師の工夫を引き出されやすくなっている。

③ 生徒に対する学校・社会・家庭それぞれの役割分担について。

アメリカの学校では、生徒に対して服装や頭髪の指導をすることはない。それらは家庭のしつけの領域であると考えられている。また、万引きした生徒を教師が警察に引き取りに行くというようなことも決してしないということであった。それは警察の領分であり、教師が関わることは越権行為であると考えられている。学校は、もっぱら学校生活それ自体に関して指導を行っている。

タスコラ・ハイ・スクールにおいては、ふたりの教頭が生徒の規律に関する担当者となっていた。ひとは主として男子、もうひとは女子の生徒について、出席状況や授業態度など、問題があった場合に指導を行うようになっている。学業に関することについては、学校が積極的に指導を行うということである。自由の国・アメリカにおいても、集団規律を守らせるための努力はしっかりと行われている。

一方、いうまでもなく生徒の規律や学習態度は、家庭でのしつけに負うところが大きい。また、社会の風潮や文化も彼らに少なからぬ影響を及ぼす。今日アメリカ社会における、教育力低下につながる問題のひとつは、家庭崩壊である。当地で聞いたところによると、生徒のおよそ半分は両親が離婚しているとのことであった。筆者の経験から言っても、両親がそろっていない場合、それがハンディとなって生徒に何らかの否定的影響を与えるということは、ままたあることである。アメリカで例に挙げられた話は、片方の親がいない場合、代わりに養育の役割を担うようになる祖父母が子供を甘やかしがちとなり、耐性にかける子供を生み出してしまふということである。家庭の教育力の低下は日本でもしばしば指摘されているところであり、“ご同慶の至り”との思いを禁じ得ない。基本的なしつけができていないと、学校生活にも様々な問題がもたらされる。遅刻・欠席など出席面での問題、授業態度、環境美化、教師に対する態度等々。もっとも視察したアメリカの学校は、地方であったためか、実際には存外落ち着いた雰囲気であった。学校自体の努力に加えて少人数クラスであること、また真に生徒それぞれの能力や個性に応じて伸ばそうとしている取り組み方などから、生徒は明るく生き生きとしていた。環境美化も十分になされており、望ましい状況であった。ただし、

より長い期間ひとつの学校に滞在したならば、様々な問題点も見えてくるであろう。

テーマとした学校・社会・家庭それぞれの役割分担に関しては十分な情報が得られたとは言い難いが、各場面で分業化が特徴的であるアメリカ社会において、学校は学習指導や出席管理など、学校生活の根幹となる事柄に関して、かなりきちんとした対応をしているとの印象を持った。何事も“おおざっぱ”といったアメリカに関するわれわれのイメージはあてはまらない。自己の負うべき責任を明確にしているのである。

(3) おわりに

「ところ変われば品変わる」は、教育においても真実であった。自分の持つ既成概念とは異なる世界をかいま見られたことは、たいへん貴重な経験となった。社会のシステムや背景が異なるため、学んだものをそのまま実践に生かすことはできないが、自分なりにアレ

ンジして少しでも役立てていきたいと思う。異なる文化の中にも普遍的なものが存在するというのもまた真実であるから。教師が真摯に生徒の成長を願い、助け、相互の信頼が築かれていく中に自らの喜びを見いだしている姿には変わるところはなかった。

筆者は帰国後、アメリカで購入したいくつかのカラフルな標語をクラスの教室に貼付した。その中のひとつ、“Attitude is the mind's paintbrush. It can color any situation.”(心構えは内なる絵筆である。それはどのような色付けをも可能とする。)を自らに対する言葉としても常に意識し、身近なところからアメリカでの経験を生かしつつ改善を計っていきたい。さらには、教育のあり方をおもとのところで規定している政治や行政によりよい変化が起こることを期待しつつ、微力ながら前向きな努力を重ね、ときに積極的な提言をも行っていきたい。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2000年3月27日 - 4月4日)

徳島県立鳴門高校 教諭 矢野 智子

3月27日 (月)

前夜より Cullowhee 入りし、WCU内の Madison Hallに宿泊。朝食後 Dr ロイスの運転するバンで観光開始。アパラチア山系のブルーマウンテンをのぞむトレッキングコースをハイキング。駐車場にはジョージアやテネシーのナンバープレートの車も多い。パイオニアヴィレッジで開拓時代の人々の暮らしに触れた後、チェロキーの保護区にあるチェロキーミュージアムを見学。チェロキーの人々の多くは保護区の中で教育を受け、高校卒業後もそこを離れず、大学教育を受ける人は少ないという。職業につくことの難しさや未来への不安感からアルコールにおぼれる人も少なくない。全米のネイティブ・アメリカンの部族の中でもチェロキーは白人をむしろ友好的に受け入れた部族のうちの一つであると聞いたが、やはり過去には悲しい歴史もあったという。この辺りの一般の高校でチェロキーのことやアフリカ系アメリカ人の歴史はどう教えているのだろう、と興味がわいた。

夕方から大学のキャンパス内で学長やコーディネーター、職員、市長、地元公立学校の校長や教員達が参加しての歓迎会が盛大に開かれた。ウェルカムスピーチの他に学生のコーラス隊によるゴスペルのアトラクションもあり、私たちは茶道のお手前と日本の歌でそれに応えた。初めて会う人達ばかりのテーブルに日本人1人で少し心細かったが、代わる代わる日本の文化や学校制度について質問してくれ、私の発言に興味を示してくれた。驚いたのはそこにいた多くのアメリカ人が名刺を持っていたことで、昨年このプロジェクトに参加したときに作った人とか、ビジネスカードとして用いている人で、日本から準備していったのが大変役に立った。

3月28日 (火)

午前中NCCAT (The North Carolina Center For The Advancement of Teaching) を見学。この施設では教員のスキルアップのために年間に様々なセミナーが開かれる。参加者はリラックスした状態で学び、体

験し、他の参加者とアイデアの交換をする中で、教科に対する好奇心や探求心を呼び覚まし、教える意欲を取り戻す。講師は州の内外から選ばれ、教員はその講座の内容により参加を申し込むことが出来る。参加するには所属長の推薦やレポートの提出が必要であるが、参加費等はすべて州側が負担してくれる。教員の高いレベルを維持しようとする州の姿勢が感じられた。ここではコーディネーターの Dr ケイシーからノースカロライナの教育システムの講義を受けた。まず学校の果たすべき役割として「社会の知識、価値の伝達」と「社会の再構築」があり、職業的、個人的、学問的、社会的な目的を達成するために教育活動が行われるという。教育活動はformal (教科)、extra curricula (教科外)、hidden (生活指導のようなもの) で構成されていて、アメリカの学校では教科を受け持つ教員の他に、進路やメディア、カウンセリングや障害児のアシストなどを専門に受け持つ教員が存在する。1人の教員が何役も兼ねる日本の学校のシステムよりはるかに専門性が高く、行き届いた指導が可能であろうとうらやましく感じた。

午後、Fairview Elementary と Smoky Mountain Highschoolを訪問。Fairview Elementaryでは1970年代に流行した「壁のない教室」のスタイルをとっている。校長はこの方が児童の成長や教員間の交流にもよいと考えているらしい。それほど周りからの音も気にならないし、開放的な雰囲気でのよいのではないかと自分も思う。1クラス23人から26人のクラスを教員1人とインターン1人が受け持っていた。インターンは教員の免許状をもらうには1年間ここで研修を積みなければならない。大学から先生が学校を訪れ、インターンに対して授業をすることもあるそうで、理論と経験を組み合わせたよい方法だと思う。同校ではEnvironmental Programとして学校の隣に先生、子供達、保護者で協力して自然観察のための池や小川、野鳥観察の施設をつくっており、そこで子供達は生物について学ぶことができる。後日小学生にそこを案内してもらったが、植物や虫の知識の豊富さに驚いた。また高学年

の生徒が自然観察により集めたデータをインターネットを通じてワシントンに送り、各国から送られた情報にもアクセスして自分たちの地域のものとは比較している様子を見せてくれた。日本の学校からのデータもあり、インターネットの普及によりいろんな形で世界への窓が開かれていることを感じた。

Smoky Mountain Highschoolでは日本の中学3年から高校3年までの約1,000人が学んでいる。校舎は平屋で方々へと伸びている。教科毎に教室は配置されていて生徒は授業毎に教室を移動する。廊下には生徒のロッカーがずらりと並んでいる。生徒の大部分は白人である。生徒はスクールバスや自家用車で登校する。制服はなく、化粧をしている女生徒やひげをたくわえた男子生徒もあり、かなり自由な雰囲気である。副校長先生と私の明日からのパートナーとなるベンダーガスト先生が私達を案内してくれた。この日はコーラスやドラマ、インテリア、マニュファクチャリング、建築などのクラスやキャリアセンター（進路室）コンピューターラボ、テレビ会議システムなども見学した。テレビ会議システムでは壁にずらりとモニターが並び、他校とつないで授業を同時に行ったり、大学の先生の授業を受けたりできるようになっていた。コンピューターラボは各棟に配置されており、ウィンドウズとマックがほぼ同数設置されている。教員は予約して授業で使うそうである。ノースカロライナでは高校生は卒業までに州のコンピューターの試験に合格しなくてはならないので、校内でもコンピューターのテストを行っている。メディアセンターのコンピューターはオンラインになっており、生徒が自由に使えるようになっている。放課後、メディアセンターでメールやインターネットを楽しんだり、パソコンを用いて課題をしている生徒の姿を見かけた。

3月29日（水） Smoky Mountain Highschool 初日

ベンダーガスト先生の迎いで7時40分頃にスモーキーマウンテンに登校。1時間目は8時5分から始まるが、教室にすでに生徒達と先生の姿があるので理由を聞くと生徒指導上の理由で罰として他の生徒より早く登校し学習しているとのこと。この学校は1日90分×4限授業である。1時間目は英文学、フランス語、スペイン語の授業を見学した。英文学の授業では生徒がスベリングのテストを行っていた。教室は中央に通路

をもうけ、30人くらいの生徒たちが通路をはさんで2手に分かれ向かい合うようにすわっていた。この2手の後ろの壁には青と赤のランプが並んでいる。生徒達はその日のムードにあわせて青のランプの席、赤のランプの席に座るそうだ。通路の先にはソファが置かれ、私達はそこに座り見学をしたが、生徒がそこにすわって授業を聞くこともあるそうだ。この先生はアイデアマンとして先生方の間でも有名らしく、生徒達ともとても親しい間柄であるように感じた。

スペイン語の授業では男女の生徒が一緒になってビデオを見ながらスパニッシュダンスのステップを踏んでいた。踊らずに勉強をしている生徒が3人いたが、この生徒達は踊るのがいやなのでそのかわりに先生から課題をもらっているそうだ。先生は最初は勧めたけれど、無理強いはしないのだという。自由の国アメリカっほいな、と感じた。2時間目はベンダーガスト先生のカレッジレベルのアメリカ史の授業を見学した。このクラスにはOHP、VTR、パワーポイント、スマートボードなどの教育機器が設置され、そのときは生徒自身が調べたことをパワーポイントを使ってプレゼンテーションをしていた。優秀な生徒達はカレッジレベルの授業をとり、大学ではその教科の単位を免除される。生徒は単位を取るためにセメスターの終わりにレポートを提出しなくてはならない。このため学校はこの授業に対して校内のテストを免除したり、時期をずらす等の配慮をしている。カレッジレベルのクラスは大学で教える資格を持っている先生達だけが教えることができる。この学校ではアメリカ史、化学、微積分学、生物学の4つのAP (advanced placement) クラスをもうけている。飛び級の制度は知っていたがこんな制度があることは初めて知った。

宿舎での夜の反省会では別の小学校や高校に配置された先生方からも興味深い報告が聞かれた。障害児を受け入れている学校に行った先生は特別なケアを必要とする生徒達を周りが自然にうけいれる雰囲気があると言っていた。1972年以来アメリカではすべての公立学校で障害児を受け入れることを法律により決められ、その生徒達のために特別な技能をもつ先生が雇われているそうだ。また小学校では大学生や保護者のボランティアを歓迎し、教育に参加してもらおうそうだ。地域と学校の結びつきの深さはこの後いろんな場面で感じた。

3月30日(木) Smoky Mountain Highschool 二日目

この日の朝は直接学校に行かず、少し離れた町にあるペンダーガスト先生お勧めのレストランに立ち寄り朝食をとった。途中車の中で教員の仕事、労働条件などについてのいろんな話で盛り上がった。アメリカの教員は年間10ヶ月分の給料しか支払われないため、長期休業中は大学や教員対象のセミナーで教えることで副収入を得る。州毎の教員免許の他に最近では全米で通用する資格(National Board Certification)を取得する動きがあり、ノースカロライナでは多くの教員がこれに合格している。もともとノースカロライナは生徒の学力レベルが低く、生徒の学力を高めるために先生の力量を高めることに州が高い関心を示し、このような高い資格を取得することで給料もあがる。この資格を取得するために、教員は授業の質の高さや生徒への実際的な教育効果ばかりではなく、コミュニティーの専門的な技術を持つ人たちを授業の中にどう生かせるか、保護者とうまくつきあえるか などの5つのカテゴリーで試される。

スモーキーマウンテンでは先生たちの1日の授業の持ち時間は3時間で授業のない1時間に教材研究を行う。部活動を持つ先生達は4時間目に空き時間をもうけているそうでウイークデーの放課後に行われる試合のために早く学校を出られるようにするためだそうである。部活動の指導をすることで給料が上乘せされる。部活動専門の先生が雇われていることもあるそうだ。

2時間目の授業から参加し、日本から準備してきた日本文化と学校紹介のビデオを上映した後、生徒や先生からの質問を受けた。生徒からは「学校ではどのようなスポーツが行われているか」とか「どんな授業やコースがあるか」とか「皆制服を着ているのか」とか「時間割はどうなっているのか」とか「悪いことをしたらどんな罰があるのか」など質問された。先生からは「日本の学校には生徒指導上の問題があるのか」とか「先生は生徒から尊敬を受けているのか」などの質問がでた。4時間目はHealth Occupationのクラスで、先生から将来医療関係の施設で生徒が働くとき、日本人の患者と気持ちよく接することができるように日本人のマナーについて話してほしいと頼まれた。丁寧さを表すお辞儀の習慣やさん・くんなどの接尾辞のつけかた、贈答の習慣などについてもう1人の先生とスキットを交えて紹介した。

夕方 Distant Learning Center を見学した。ここには教員を始め銀行員やビジネスマン、社会サービスに携わる人たちがコンピューターを学ぶためにやってくる。教員は5年おきにこの施設で1週間学び、49時間のインストラクションを受け、最新のテクノロジーに触れる。この研修を受けることで500ドルが参加者に支払われるそうだ。研修後再度あつまり、研修を受けたことで授業がどう変わったかを発表する機会ももうけられている。またここにはテレビ会議の施設があり、学校に対しては無償で大学レベルの授業を放送している。モニターの向こうの生徒に異変があればすぐその学校の副校長に電話がつながるシステムになっているというから驚きである。夕方の放送は学校の下校時間にあわせてはじまり、先生達も授業を受けられるようになっている。講師は先生の希望に合わせて呼んでいるそうである。

夜にはペンダーガスト先生の自宅に招待され夕食をごちそうになった。メニューはフライドチキンにマッシュドポテト、グリーンピースにアップルパイ。典型的な南部料理とのことでどれも美味であった。ペンダーガスト先生の奥さんの名前はアリスさんといって奥さんも同じ高校で英語を教えている。スモーキーマウンテンには夫婦の教師が他に2組いるそうである。教科横断の日本の総合学習の試みについて話をしたら、二人はとても興味を示した。二人は日頃から自分たちが教えている教科(世界史と英語)についてお互いに協力しあえないか、と話し合っているようで、たとえば世界史である地域のある時代について教えているのと同時に英語の授業でその地域や時代に関連した文学作品を読むようにするなどお互いに関連をもたせながら授業を進めていければ、と考えていた。学校側に申し入れている最中だそうだ。

3月31日(金) Smoky Mountain Highschool 三日目

1時間目はミセスペンダーガストの11年生の英語とサンプル先生の9年生の英語の授業を半分ずつもう1人の先生と時間を分けて日本紹介の授業を行った。授業の後でスモーキーマウンテンの生徒と文通を希望している鳴門高校の生徒15人のプロフィールと写真を紹介し、先生に教室にそれを掲示してくれるよう頼んだ。

2時間目にはオーケストラを見学し、後半にはNEWSPAPERのクラスを見学した。このクラスは10年生か

ら12年生の生徒が選択できるのだが、クラスのサイズが限られているので(12名)コンピューターに熟達し、英語の担当教諭から推薦を受けたものしか選択することが出来ない。実際に新聞社でつとめていた経歴のあるライス先生の指導のもとで月刊の学校新聞を発行している。生徒のうち2名が編集とレイアウトを担当し、後の10名は取材したり、記事を書いたり、写真をインターネットから見ついたり、印刷費を助けるために広告をとったりしているそうである。生徒にコンピューターは何年使っているのか、と質問したところ、7~8年という答えがもっとも多く、先生さえもが舌を巻くほど詳しい。選択クラスの多くはこのように学年の枠を越えて選択することができ、生徒にとってプレッシャーの大きいSTATE TESTがないために生徒はリラックスして授業を受けることが出来ると先生は言っていた。

3時間目はベンダーガスト先生の世界史の授業に参加した。先生はこのクラスの生徒と鳴門高校の生徒とを交流させたいと考えており、授業後、「アメリカ人についていえること、日本人について考えていること」というタイトルで生徒に作文を書かせた。

4時間目にベンダーガスト先生と今後どのような形で具体的に交流を進めていけるか、具体的な方法について話し合った。(具体的な内容は研究報告書の中で紹介)夜、再びベンダーガスト先生のお宅を訪れ、日本から持参した「すだち酒」を飲みながらお互いの家族のこと、職場のことなど話に花を咲かせた。先生は先生達の中でも厳しい方で、宿題も多く出すそうだが、そのことで生徒の保護者にはとまどいを感じている人達もいる、と言っていた。学校を託児所のように考えて厳しいしつけや勉強のプレッシャーを望まない親たちが増えている、と先生は嘆いていた。

今までのアメリカの教員に対して自分が持っていたイメージとはずいぶん違って、先生達は自分の自由な時間の多くを教材の開発や教えることのスキルアップのための研修参加、次々と現れる最新の教育機器を授業で活用するための研究等に費やしていることを知った。

4月1日(土) Smoky Mountain Highschool 最終日

朝、副校長のフェルナンデスさんの案内でBuilding Trades Classの生徒達が学校の近くに立てている家を

見学した。このクラスでは建築士の資格を持った先生の指導のもと、建築や電気など、家を建てるために必要な基礎知識を学ぶコースを終了した生徒達が実際に資材を購入し家を建てていた。バスルームが3つもある2階建ての立派なこの家は、完成後、一般公募により売却されるそうである。800万の資材でたてたこの家は売却時には2千200万の値がつくそうで、その儲けは次年度の資材購入に当てられるとのことであった。

スモーキーマウンテンはこのように様々な選択授業を開講しており、生徒は自分の興味に応じて選択することが出来る。選択科目には日本では専門学校で教えられるような専門知識と実技を多く含んでいるものもあるので、高校卒業後すぐに実社会で通用する人材を育てることができる。生徒も得意な面を生かして、いきいきと授業を受けているように見えたが、生徒の人氣が、このような現実的で実用的な科目に集中し、アカデミックな科目に対してやる気を失ったり、必要ないと考える生徒が多いことを危惧している先生達もいるようである。

副校長のフェルナンデス先生のオフィスにおじゃまし、管理職としての彼女の仕事内容をお聞きした。まず彼女の重要な仕事として必要なスタッフの確保があげられる。一般公募に応募してきた人に対してインタビューをしたり、適当な人材に目星をつけその人の職場に出向き、交渉をしたりして、有能なスタッフを集めるのは彼女の責任である。また校長や他の教員とチームを組んでスタッフの勤務評定を行う。さらに生徒指導上問題のある生徒に対して訓告をしたり、保護者と面談を行うのも彼女の仕事である。彼女は他の州で教員を務めていたことがあるが、大学で学位を取得し、管理職として数年前にこの学校に採用された。日本と違って、一般の教員が管理職に昇進するということはない。彼女はまだ若いのにとても重要な役割を担っている。

気になっていた生徒の選択科目の選択のさせ方についてお聞きした。日本の学校に比べ選択科目の数が多く、しかも入学時に自分の将来のことまで考えて正しい科目を選択させるのは難しいだろうと考えたからだ。それに対する答えは次のようなものだった。生徒は入学前に保護者とともに教科選択のためのガイダンスを受ける。進路課(Career Information Center)には専門のスタッフが3人いるが、この3人と教員が手分

けてすべての生徒・保護者に対しての進路相談を行う。分厚いマニュアルがあり、「将来この方向に進んでいくなら、9年生ではこれ、10年生ではこれ……のコースを選択するように」とフローチャートの形式でモデルが示されていてとてもわかりやすい。これに従って生徒は選択科目の登録を行うが、もちろん途中で進路希望が変わることもあり得るので、その場合は生徒が進路室に行き、相談した上で、次の選択の可能性について話し合う。

このあと、12年生の英語のクラスに参加し、シニアプロジェクトを終えたばかりの生徒達にインタビューすることができた。(シニアプロジェクトについては研究報告書の中で紹介)

4日間はあっという間にすぎた。様々な授業を見学し、多くの先生や生徒と言葉を交わした。私たちの訪問授業は学校内で評判になっていたようで、「日本に興味がある」「日本に行きたい」と話しかけてくる生徒もいた。もっと長く滞在して、日本について、私たちの地域や学校、生徒について深く知ってもらいたい、アメリカの生徒に実際の日本を見てもらいたい、と強く感じた。

夜は同校の英語教師のパム先生のうちにホームステイさせていただくことになっていた。レストランでの夕食に先生は日本の話をもっと聞きたい、という男女の生徒を招待した。2人ともとても礼儀正しい生徒で、持っていった写真や日本語の表などについての説明を熱心に聞き入っていた。女の子が持ってきたプラムの写真では高校生達が大人のように盛装し、レストランで食事をしたあとダンスパーティーではしゃいでいる姿が写っていた。日本の生徒が見たら、さぞうらやましがらうだろうな、と思いながらそれを見ていた。2人はパム先生にはシニアプロジェクトの指導教官としてお世話になったそうであり、学業優秀で大学からの奨学金をうけて進学することが決まっているとのことで、「将来お金を貯めて日本に必ず行くから」と言って帰っていった。

4月2日(日) ホームステイ

パム先生は森の中の一軒家に1人で住んでいる。息子さんもワシントンで教員をはじめたところだそうだ。年齢を感じさせない、はつらつとした女性である。2年まえまで、スモーキーマウンテンに留学していた中

国人の女の子をホームステイさせていたそうで、私は彼女の使っていた部屋にとめていただいた。パム先生は英語を教えている。母国語として英語を教えている先生と、外国語として教えている私にはその目標も違うだろうけれども、参考になることも多いに違いないと考えて、英語の授業についていろいろ質問してみた。

まずスモーキーマウンテンでは各セメスターのはじめにシラバス(教授細案)を提出することが決まっている。また教科選択のオリエンテーションで渡されるレジストレーションガイドブックには各講座が対象とする生徒、達成目標ねらい、学習内容などが紹介されている。ただし11, 12年生ではあらかじめ決められたシラバスがあり、それにほぼ沿う形で授業を行う。テキストは学校単位で採用したものを使っているが、必要に応じて持ち込み教材を用いることも多い。テストは9年生、10年生では州の学習指導要領に従い、STATE TESTを実施しているが、11, 12年生では教師がテストを作成する。12年生ではシニアプロジェクトを完成させることで試験のかわりになっている。

英語の力(国語力)は社会生活を営む上で欠かすことができない。技術系の学校への進学や軍隊を志す生徒を対象とした授業では英語と商業のカリキュラムを統合させ、キーボード上の操作を身につけながら英文学や世界文学について学ぶことができる。「総合的な学習」で提案されている教科統合学習の具体例として興味深い。さて、普段の授業であるが、パム先生の場合、だいたい次のような手順で行っているようだ。

- ① 次の授業で進む範囲を読んでくることを予習として課す
- ② 授業のはじめに読んで本文の内容についての簡単なQ.A.を行う
- ③ 古典文学であれば時代背景について学習する
- ④ 語彙の確認
- ⑤ 鑑賞、内容理解

パム先生が授業の中で気を配っていることは、古典を学ぶ際にも、内容をいかにして現在の社会事象や自分の生活と関連づけて、生徒に興味を持たせるか、またコンピューターの普及により正しいスペリングを覚えていない生徒が増えてきていることに対して、どうするか、ということであるらしい。パム先生は月に2度授業研究のワークショップに参加するために遠く離れたローリーの町にでかけている。また夏休みには州政

府が資金を提供して行われるサマーセミナーにも参加しているという。休日を返上して研修に参加する先生の熱心さとそれをサポートする州の教育行政のありかたには私たちが見習うべきことが多いと思った。セミナーで使われた "Seven Ways of Teaching" という本をおみやげにいただいた。

女同志、国は違っても同じ職業をもつ者として彼女と話していると共感することが多く、とても楽しい2日間であった。緑に囲まれたデッキでワインを片手に何時間も話し込んだ。昼間はシルバの町にショッピングにつれていってもらい、夜は友人夫妻とハンバーガーパーティーをしながら全米リーグの4強に勝ち残ったノースカロライナ大学のバスケットチームの試合をテレビで観戦した。素敵な先生に巡り会えて本当に良かったと思う。

4月4日(火) Exploris Middle School、 ノースカロライナ州教育局訪問

同校はグローバル教育をテーマにした博物館に併設されているチャータースクールである。96年に州の認定を受けてから6、7、8年生と今年はじめて3学年がそろい、生徒数はそれでも168人という小規模校である。設立の目的は「最善の教育をおこなう優れた学校」「新しい試みをする実験校」「社会に対してのデモンストレーション」でありグローバル教育(国際理解)をその教育活動の中心に据えている。ここでの授業形態はとてもユニークなものであり、できる限り従来の教科の枠をとりはらっている。たとえば Beginning of Society という授業ではアメリカの歴史、地理、科学、自分の作りたい学校について学ぶし、Global Arts という授業ではフランス語やスペイン語、芸術や体育について学ぶことができる。生徒達は2週間ごとにその週の学習達成目標をノートに書き先生に見せる。その後、目的を達成できたか自己評価し、なぜ達成できなかったのかを先生と一緒に考える。1年に2度行われるポルトフォリオと呼ばれる懇談会では子供が先生の隣で自分の学習の跡をファイルにして親に見せながら学習の跡と成果を報告する。このような自己評価は、自己を客観的に見つめ、自己の考えを深め、自己をよりよく改善し、今後の学習をよりよく進めていくのに有効であるだろう。経験を積んだ先生と若い先生がペアを組み、エネルギーに授業を展開していく。放

課後は一日の反省とつぎの授業へのアイデアを出し合う。学校を視察にくる人達の意見もどんどん授業に取り入れていこうとする先生達の情熱には圧倒されるものがあった。

午後ノースカロライナ州教育局を訪れた。立派な会議室に通され、現在教育局ではABCs Plus という名の教育改革を進めている。州内のすべての学校は州政府によりコントロールされており、その教育の成果が州の統一試験により数字ではかれる。予想される学力の伸び率が高い学校には報奨金が与えられるが、低い学校にはティーチャーズアシスタントが派遣され、模範となる学校のデモンストレーション授業を行う。現在教育局が課題としているのはマイノリティーとホワイトの学力差をいかにして小さくするか、ということ、また生徒の学習動機を高めるために、進級の基準を難しくすることだそうである。現在ノースカロライナの生徒は3、5、8年生を終えるときに student accountability standards と呼ばれる一定の基準をクリアしなくてはならないことになっている。また、2003年からは高校卒業時にコンピューターの試験と卒業試験(代数、生物歴史、英語、政治)を課す予定だ。

この教育改革を紹介するホームページはN. C. wise Owlと呼ばれ、誰でもがアクセスできる。ここには幼児から高校までの一貫した教育の方針が示されており、教師、生徒、親のためのゾーンにそれぞれ分かれ、有益な情報を得ることができる。

4月5日(水) サマリーカンファレンス

日程も最終日を迎えた。3地区に分かれて研修した日本人の先生達、昨年このプロジェクトで来日した先生達、6月に来日予定の先生達が一堂に会した中で、今回の滞在中に見聞したことをまとめて報告するサマリーカンファレンスが開かれた。ウェスタンにステイした8名(稲井氏、鹿江氏、松村氏、森田氏、宮本さん、松浦氏、花垣さん、矢野)とコーディネーターの小野先生で前夜ホテルの一室に集まって、発表に備えた。苦勞(?)を共にした仲間として息はピッタリ。思いで話につい脱線しながら、自分たちの経験をまとめていった。私たちのプレゼンはコンピューターがお手の物の鹿江先生のおかげでパワーポイントを使って行われることになった。

私たちの発表内容はつぎのようなものであり、これ

が私たちの見たアメリカの学校教育である。

タイトル EAST MEETS WEST

アメリカの教育と日本の教育との比較

1 教科の統合

いくつかの教科はすでに統合されているが、読み、書き、計算などの技能は系統的に教えられている。

2 テクノロジーの浸透

コンピューターは低学年のときから学習の中に取り入れられている。コンピューターはもはや目的ではなく情報を得るための手段である。

3 五感に訴える授業

授業で用いられる教育機材は多種多様で生徒一人当たりにあたる教育機材は充実しており、視覚や聴覚をフルに使った学習が可能である。

4 教育の多様性

先生は幅広い学習能力をもつ生徒達に、それぞれの興味や学力レベルに応じた教育内容を教えることができる。少人数のクラスや学力に応じたクラス編成、パラエティーに富んだ選択授業、アシスタントティーチャーの導入などがそれを可能にしている。

また学習に特別な助けを必要とする生徒を支援するシステムも確立している。

5 自己教育力の重視

すべての授業を通じて、卒業後、社会の一員として働ける人材を育成することを目標にした教育を行っている。

6 しつけの一貫性

教員は生徒のしつけについて強い関心を持っている。生徒は一貫したしつけのポリシーのなかで成長し、授業中は責任ある一人前の人間としてマナーを守って行動することが要求されている。

7 仕事の分業化

教科を教える教員、カウンセリング、進路指導、情報教育等々を担う職員、学校を運営する管理職、とそれぞれに担当の領域がはっきりしているため、自分の領域に対して専門性が高い

8 多様な評価方法

ペーパーテストのみに頼らず様々な評価方法が試みられている。(例) ポルトフォリオ

総合的な学習の時間における国際理解教育とテーマ学習の可能性

徳島県立鳴門高等学校 教諭 矢野 智子

(1) はじめに

総合的な学習の時間の学習課題の例として「国際理解」や「生徒の興味、関心に基づくテーマ学習」が示された。鳴門高校では現在は各教科の中で諸外国について扱われることはあっても、「国際理解」そのものを目的に据えた教科の枠を越えた教育は行われていない。また、テーマ学習は教科学習やホームルーム活動においてしばしば用いられるが、教師主導型であり、必ずしも生徒の興味、関心に沿うものではない。今回の研修でスモーキーマウンテン高校を訪れ、パートナーの先生と協力して今後の両校の具体的な交流の道筋をつくることを試みた。生徒が授業や今までの生活経験の中で得た相手国についての知識やイメージがどのようなものであるのか、世界と自分との関わりについて普段どの程度意識しているのかを知った上で、お互いの国の世情をよりリアルに認識し、親近感を強めるための効果的な方法を探った。またこの交流が国籍を問わない普遍的な価値観や地球規模で取り組むべき課題について気づかせるきっかけになるよう意図した。テーマ学習についてはアメリカの学校でははやくから取り入れている。実際にどのようなテーマを扱っているのか、どんな形で行われているのかを研究した。

(2) 研究の概要

研究課題1 国際理解のための交流のありかたを考 える

① 事前準備

1 学校、日本文化紹介のビデオ作成 (20分)

目的：現地の学校で日本の高校の様子、日本の伝統行事、文化について話す資料とするため。

方法：管理職、同僚、生徒にその趣旨を説明し、ビデオ撮影の許可、協力を求めた。内容は次のようなものである。

- ・校舎内外の風景
- ・授業風景（英語、家庭科、音楽、書道、ホームルーム活動等）

- ・本校AETへのインタビュー
- ・放課後、部活動の風景
- ・初詣、雛祭り、生け花、茶道、弓道、同窓会、日本料理店など

2 学校紹介のハンドアウト作成

目的：日本の学校制度について理解を深めてもらうため

方法：英語版学校要覧から必要なページを抜粋し、説明を書き加えるなどして学校紹介の資料とした。学校行事、一日の時間割例などについては生徒が写真、イラストなどを加えて掲示できるようにした。

3 ホームルーム活動のテーマ紹介

目的：今後相手校と共同して研究できるようなテーマをさぐる話し合いのきっかけとするため。

方法：年度当初に提出する各ホームルームの年間計画からテーマの一覧表を作成した。

4 日本の英語教育の紹介

目的：日本の教科書の中で取り上げられているアメリカに関連する事項を紹介し、英語教育を通して日本に入ってくるアメリカのイメージについて、現地の人の考えを知るため。

方法：英語Ⅰ、Ⅱの教科書のアメリカに関連するページに印を付ける。そのページを読んで本校生徒がアメリカについて持った感想、イメージをまとめ、英訳する。指導案や生徒のノートをコピーし、普段の英語の授業の様子を伝える。

5 生徒プロフィールの作成

目的：相手校の生徒との個人レベルでの交流を希望する生徒をつのり、今後の交流の核となる生徒を育てるため。

方法：授業、校内放送などを通じて相手校と文通やメール交換をしたい生徒を募った結果15名の生徒（全員女生徒）が応募。プ

プロフィールを作成する。授業の中で手紙やメールを送ってくれるように呼びかけ、しばらくの間教室に掲示してもらう。

② 現地での授業実践

1 簡単な日本語紹介

2 ビデオ上映

理解しやすくするため上映前に目次と簡単な解説を書いた用紙を配布した

3 本校の校規について大まかに説明

4 ビデオの内容、学校制度に関するQ A

生徒からでた質問の例

「日本では1年のうち何日学校に通うのか。」

「学校は何時に始まり何時に終わるのか。」

「どんなスポーツクラブがあるのか。」

「どんな選択の授業があるのか。」

「日本には悪いことをする生徒はいるのか。」

「どんなことをすれば謹慎になるのか。」

5 日本文化に関するクイズ(T or F/Guess What)

正解の多い生徒には簡単なおみやげを渡した

6 授業の感想を記入してもらう

③ 授業中の観察

1クラスの人数が20人前後であり、先生を囲むような机の配置がされているため、全員の顔がよく見渡せた。発言の際には挙手をし、こちらの話している最中に発言しようと生徒に対して先生や他の生徒達は黙るように、との合図を送っていた。生徒は疑問があると頻繁に挙手し、リアクションがよい。授業が始まってから教室に入ってくる生徒が数名いて、その生徒達は席に座らずに床や先生のイスに腰掛けるなどしていた。生徒は遅れて入室するための許可書を事務所でもらっている。教室は先生の趣味で飾り付けられており、生徒達の作品や学習のテーマにあった資料なども展示されている。英語、外国語の先生はほとんど女性であり、インターンのアシスタントが付いているクラスもあった。クラスはいろんな形で能力別、コース別にわかれており、英語の授業では学年別、数学やコンピューター、他の選択科目では学年の枠を越えてクラスが構成されていた。

④ 授業後の考察

生徒達は日本の文化に対して本やニュース、ファッション、格闘技、映画などを通じて得た断片的な知識を持っているが彼らの日本のイメージの中には中国や

韓国の文化と混同している点が多い。学校のシステムや、生徒たちの学校生活の様子などについて日本の高校生と自分たちとの共通点、相違点を見だし、身近に感じる一方で、芸者、武士、仏教寺院、特攻隊など日本の象徴的なものを理解しがたいもの、または東洋的な神秘性のあるものとしてとらえているようであった。「現在のアメリカの文化が多民族の持ち寄りの中から発生し、歴史が浅いのに対して、日本の文化はもっと古くからあるものに根ざしていて、現在の生活の中でも伝統を尊び、その精神を受け継いでいる。日本の文化はとても優雅である」との感想があったが、確かに古いものを大切にし、形式にこだわる日本人の姿はアメリカ人にとっては異質のものに見えたと思う。

先生達の興味や関心は日本の教員の労働条件や教員が授業の中でいかに生徒の尊敬を集め、生徒をうまくコントロールしているのかという点に集中していた。授業で勝負の教科指導の先生達も授業をスムーズに運び、十分な教育効果をあげるためにはおのずと生徒指導能力を求められているのだろう。

⑤ 交流に向けて

交流の開始に向けてまずパートナーのベンダーガスト氏が自身の世界史のクラスで私を紹介し、今後私の学校と彼の世界史のクラスとで交流を持つ予定であることを伝えた。私の授業のあと、彼はクラスの生徒全員に「自分たちについて知ってもらいたいこと」「日本人(人)について思うこと」というテーマでエッセイを書くように求めた。生徒達の書いたエッセイを集約すると次のようになる。

「自分たちについて知ってもらいたいこと」

- ・アメリカの生徒はみな親しい友達同志である
- ・アメリカの生徒はぶらぶらしたり、音楽を聴いたり、おしゃべりをするのが好きである
- ・アメリカの生徒はパーティーに行くのを楽しみにしている
- ・アメリカの生徒は学校に行くとき制服を着ない
- ・アメリカの生徒は服や髪型でお互いを判断する事が多い(かっこよくしなければならない)
- ・アメリカ人はしゃべりすぎである
- ・アメリカ人は自由を多く与えられている(免許は16歳からとれるし、18歳から選挙権がある)
- ・アメリカの生徒は自分の考えを自由に表現することができる

- ・日本の生徒は1年に230日学校に通うが、アメリカの生徒は180日しか行かない
- ・大人たちは自分たちの年代の人のことをみんな「不良だ」と思っているが、つきあうとその半分も悪くないことが分かってもらえるだろう
- ・アメリカの生徒は長い休みには親の手伝いをしておこづかいを稼いだり、アルバイトをしたりする
- ・アメリカ人は一連のモラルの基準にのっとって生活していて、基準から外れると社会からつまはじきにされる
- ・アメリカ人はスポーツが大好きである

「日本（人）について思うこと」

- ・日本の生徒は礼儀正しく親切である
- ・日本人の生徒はスマートでクールである
- ・日本人はあまりしゃべらない
- ・日本人の肌の色はきれい
- ・日本人の生徒は学校にいる時間が長すぎる
- ・日本人は親しみやすく、寛大である
- ・なぜ日本の生徒は制服を着る必要があるのか
- ・日本人はとても狭い土地に大勢が暮らしている
- ・日本の生徒はどんなことをするのが楽しいのか
- ・日本人のことはあまりよく知らないが、とても興味がある
- ・日本人は自分たちの文化をととても大事にしている
- ・日本人は第2次大戦中アメリカにひどい目に遭わされたのに、なぜアメリカ人と仲良くできるのか

授業後、このエッセイも参考にしながら今後どのようなかたちで交流を始めればよいのかをベンダーガスト氏と話し合った。

まず、日本の学級（ホームルーム）にあたるものがアメリカにはない。交流は授業の中で行われることになる。現在世界史の授業ではヨーロッパの歴史に重点が置かれているため、日本の歴史にはあまり触れておらず、アジア史として中国や韓国の歴史とともに教えられている。彼は生徒が最も興味を持っている中世・近世のサムライのことや、戦後の日米の関係について生徒にもっと知ってもらいたいと思っている。また、どんな形であれ異文化に触れることは生徒の視野を広め、世界について学ぶ必要性を自覚させるきっかけに

なる、と考えている。

一方、鳴門高校では担任の裁量で自由にテーマを設定し生徒が活動できるのは週1回のホームルーム活動に限られる。初めはホームルームの生徒（40人）を交流の対象とするのが現実的である。昨年度担任した生徒からとったアンケートの結果ではアメリカの生徒との交流を積極的に行いたいと希望する生徒が半数以上あったが、具体的に何をしたいか、という問いに対してはメールや手紙の交換を通じてアメリカの学生の日常生活の様子や流行っている音楽やファッションの情報を知りたいと答えた生徒が大半であった。交流を望まない、と答えた生徒の理由は「興味が無い」「英語がわからない」等で実際に生徒の英語力を考えると言葉の壁は大きいと思われる。私自身は生徒たちが交流を通じて新しい知識を得るだけでなく、何か共通のテーマについて意見を出し合い、討議する中で、様々なものの捕らえ方、問題解決方法に触れ、自身の考えを深めたり、生活を振り返るきっかけを得たりすることを望んでいる。

話し合いの結果、次のような形で交流を始める約束をした。

【スモーキーマウンテン高校から】

手段：ホームページ、電子メール

内容：世界史クラスで作っているホームページを通じて生徒の作品を発表したり学習状況を知らせる。校内の様子を伝える学校新聞を送ってくる。最近生徒の間でブームになっている日本語のプリントされたT-シャツ、キャップやスラッグを教えるビデオを作成し鳴門高校に送ること。

【鳴門高校から】

手段：壁新聞、ビデオレター、電子メール

内容：生徒の自己紹介、日本の歴史や地理（日本史、地理選択の生徒が授業の進行にあわせて説明する）、時事問題（英字新聞からニュースのヘッドラインをとりだし、内容を簡単に説明する）日常の出来事、学校行事（エッセイ形式で生徒が変わるがわる書く）簡単な日本語の紹介などを含めた生徒の作品を定期的に発信する。ホームページを閲覧し世界史クラスの生徒の個人情報や学習の様子を知る。

⑥ 帰国後の実践

- 1 4月に新クラスが編成され、2年生を担当することになった。クラス開きの時に、この研修に参加したことや、その意義、このクラスが中心となってスモーキーマウンテン校と交流を始めていくつもりであることを伝えた。
- 2 第1回目のホームルーム時に地図を用いてノースカロライナ州の地理や歴史について説明したあとスモーキーマウンテン校の学校の概要について鳴門高校と比較させながら話をし、現地滞在中に撮影したビデオを編集したものを生徒に見せた。
- 3 受け取ったエッセイを本校AETの助けを借りて、要約し、それを黒板に列記した。アメリカの高校生が自分達にもっているイメージに対して自分達はどうか感じるか、前のビデオをみた感想などを含めてグループに分けて話し合い、その内容をレポートにまとめて提出させた。

(2、3のホームルームの様子はビデオで撮影した)

⑦ 今後の見とおしと課題

今後は次のように交流を進めていく予定である；アメリカの新学期が始まる9月に向けて生徒の自己紹介のビデオ撮影と、壁新聞の作成に取りかかる。生徒をいくつかのグループに分け担当を決め、全員が何らかの形で関わられるようにする。エッセイについてはAETの協力も得ながら全員が1度は英語で書くように指導する。文化祭のクラス展示の場を利用し、活動の状況を全校にも知らせる。

この交流が本校に根をおろすには、生徒にとって魅力のある交流内容であること、単発的ではなく定期的に行われること、交流の状況をできるだけ他の教員や生徒にオープンにし、学校全体に波及させていくことなどが必要である。他校の交流例も参考にして、多様な交流のテーマ、方法を紹介し、それぞれの教員や生徒の専門分野、興味を中心に合わせた有意義な交流が可能であることを示していきたい。

研究課題2 テーマ学習についての調査、研究

① スモーキーマウンテン高校でのテーマ学習

同校ではシニアプロジェクトという名前でテーマ学習を行っている。シニアプロジェクトには卒業の条件としてすべての12年生が参加しなくてはならない。生

徒の興味、関心によって自由にテーマを選択し、放課後や休日などの時間を用いてほぼ1年かけて完成させる。手順は次の通りである。

- 1 テーマを設定する
- 2 テーマについてインターネットや雑誌でリサーチを行う
- 3 テーマに関して詳しい人を探し、助言者(Mentor)になってもらい、その人に入門し、ものづくりに参加したり助手をつとめたりする体験を通じて理解を深める(助言者から活動状況についての評価を受ける)
- 4 レポートの中間発表を行い、表現方法、発音などについて英語教員より指導を受ける
- 5 英語教員により最終のチェックを受けレポートを完成させる
- 6 学校関係者、コミュニティーの人など5人の前でプレゼンテーションを行い、評価を受ける。

テーマは興味に応じて実にさまざまである。

例

「タイのムエタイについて」

「ドラッグ被害についての低学年での教育について」

「ストレス解消法について」

「東洋医学、瞑想・ヨガについて」

マンガ本について友達と共同研究した男子生徒は自分たちの作品を発表し、100部製版した、と語っていた。生徒がこのシニアプロジェクトの中で行った学習活動は次のようなものである。

- ・観察や調査
- ・社会体験
- ・知識や経験の整理、分析、文章化
- ・発表や討論

生徒の感想は「自分のテーマについて深く知り、ますます興味を持つようになった」「ほとんど自分の力だけで仕上げるので為になった」「人前で発表しとても緊張したけれども、自信につながった」と前向きであり、一つのプロジェクトをやり遂げた満足感を味わっているようであった。

② エクスプロリスミドルスクールでの実践例

エクスプロリスミドルスクールはグローバルスタディをテーマにした博物館に併設されているチャータースクールで、「優れた学校での最善の教育」をめざ

し、グローバルスタディを中心に据えた教育の取り組みを提唱する実験校である。州が定めたカリキュラムに独自のカリキュラムをプラスしている。ここでの教育目標は次の3つである。

「批判的な思考の形成」

「学習の喜びを知り、自己教育を高める」

「地球市民として活躍できる人材の育成」

ここでの典型的な1日はつぎの通りである。

朝の集い（全ての生徒、教師が出席し、ニュースや社会問題についての報告がある）

→数学のワークショップ（数学は同校で教科として残している唯一の時間である）

→グローバルアート（フランス語かスペイン語、芸術か体育を1日交代で行う）

→プライムタイム（14～18人の生徒が集まり、社会問題について話し合う）

→テーマ学習

【テーマ学習について】

「自分たちに関する10の質問」

「世界に関する10の質問」

生徒達は学年のはじめに「自分たちに関する10の質問」と「世界に関する10の質問」を考えてくる宿題を出される。すべての生徒が考えてきたそれぞれの質問を教師は短冊に書き込み、2つの模造紙にはりつける。その際、生徒の質問がどんな分野に属するものか（化学、自然、生物、政治、地理 etc.）によってグループ分けする。毎日のテーマ学習の時間にこのうちの一つをとりあげ、そのテーマについて皆で学習する。

③ 考察

このようなプロジェクトが成功する背景には生徒の自由、自主性を尊重し、自己教育力を高めることに重点をおいたアメリカの教育理念があることは明らかである。日本の学級においてこのテーマ学習を行うには、まず研究課題を生徒自身に見つけさせる方法を工夫しなくてはいけないだろう。学校や塾に拘束される時間が長く、余暇を有効に利用することが苦手な生徒にとっては「自分は本当は何に興味をもっているのか」を自覚するのが難しいと思う。

こちらが何をねらいとしてテーマ学習をするのか、最終的にはそれを通してどんな態度や力を身に付けさせたいのかを教師側があらかじめ絞っておく必要があ

るだろう。これは生徒の活動について公平に評価する基準にもなるため重要であると考えられる。また目標達成のためにはどんな学習形態をとり、どんな活動をとりいれたらいいのかを検討していかなければならない。テーマに関してどう切り込んでいくのか、生徒の今持っているどんな知識が役に立つのかについて助言をしたり、新たな知識や情報収集の手段を紹介することも必要と思われる。

(3) 現地調査の日程

同じくスモーキーマウンテン校で研修した稲井氏のものほとんど同じなので省略

(4) おわりに

さまざまな興味・関心、家庭背景をもつアメリカの少年少女たちの独自性を尊重し、自ら学ぶ意欲を高める授業を研究しながら、一方では州政府からの強いプレッシャーのもと生徒の学力アップに心血を注がなければならないアメリカの先生たちは、日本の先生以上に厳しい立場に立たされている、と感じた。今回訪れたスモーキーマウンテン校にはホームルームという概念がないため、人権教育や環境教育、国際理解教育などは各教科を教える先生達の裁量で教科の学習事項と関連づけて教えられる。今回のパートナーはたまたま歴史の先生だったが、他の教科の先生とも交流を広げていけば、交流のテーマにバラエティーをもたせることができると思う。自校にとっても相手方にとっても有益な交流となるよう今後も研究を続けていきたい。

研究とは直接関係ないことだが、日本とアメリカの教育制度を比べたとき、政府、学校、家庭、生徒本人……と責任の所在があいまいな日本の教育制度とは違って、アメリカの教育においては各自の担うべき責任の範囲がよりはっきりしている、と感じた。これはアメリカの教育の良い点でもあり、あるいは落とし穴でもあり得ると思う。仕事の分業化は学校の中でも進んでおり、一人の生徒を学校のスタッフ全員で育てる、という雰囲気は日本に比べると希薄である。スタッフへの連絡事項は各自のメールボックスに入れられる書類で済まされ、スタッフ全体で集まる機会はとても少ない。教員が授業以外の場面で生徒と触れ合う時間もとても少ないのではないか。また人種的な問題、貧富の差に対してもアメリカの教育はある程度あきらめ

に近い感情をもって放棄しているのではないかと感じた。今回の研修に参加した日本人教師から聞かれるそれぞれの学校の様子はその地域によりかなり趣を異にするものだった。ニュースで目にするアメリカの学校での悲劇的な事件はこのあたりに起因しているのでは、と思ってしまう。

「百聞は一見に如かず」とはまさにその通りで、自分の抱いていたアメリカの教育に対する想像の多くがこの旅行中に誤りであったことに気づいた。きっとアメリカから日本の学校を視察に来る先生も、私と同じよ

うな気持ちになるのだと思う。けれどもアメリカの教育の本質を知るにはこの短い滞在期間では不十分であった。私の中途半端な理解が、かえってアメリカ教育に対する見方をゆがめてしまっていないか、心配である。実際にそこのスタッフとして働いてみなければ、その教育内容や方法の善し悪しについて語れないだろう。これからも現地で知り合った教員と交流を続けて、私自身のアメリカ教育への理解を深めて行きたいと思う。